

概 況

[歌舞伎]

2025年の歌舞伎界

小玉祥子

「菊五郎襲名興行と三大名作上演」

大きな話題は歌舞伎界屈指の大名跡である「八代目尾上菊五郎、六代目尾上菊之助襲名披露興行」が5、6月の歌舞伎座を皮切りに、大阪・松竹座(7月)、名古屋・御園座(10月)、京都・南座(12月)と各地の劇場で催されたことだろう。

八代目の父が七代目菊五郎を名乗り続ける稀な形となった。その八代目は5月の歌舞伎座昼の部で長男の六代目菊之助、玉三郎と3人での「京鹿子娘道成寺」の花子を艶やかに規格正しく踊り、六代目菊之助も形、間合いともに的確な所作を見せた。夜の部の八代目襲名披露演目が「弁天娘女男白浪」。八代目は「浜松屋見世先」の弁天小僧で色気と鋭さを見せ、六代目菊之助は「稲瀬川勢揃い」の弁天小僧を亀三郎、梅枝、眞秀、新之助という同世代で勤めた。

6月の歌舞伎座の昼の襲名演目は「菅原伝授手習鑑」。「車引」は六代目菊之助の梅玉丸で、飛び六法にスピードがあり、見得は重心が低く形がきまっていた。「寺子屋」は八代目菊五郎の松玉丸で首実検では敵役らしく抑制をきかせ、二度目の出から父としての心情をあふれさせる。時蔵の千代、愛之助の源蔵、雀右衛門の戸浪と周囲もそろった。

夜の襲名演目は「連獅子」。八代目菊五郎の狂言師右近後に親獅子の精、六代目菊之助の狂言師左近後に仔獅子の精。前シテで八代目が厳しさの中にも子への思いを感じさせ、六代目は視線の動きがたくみで、所作の意味を明確に伝えた。後シテは両者とも動きが鮮やか。

もうひとつの大きな話題が「仮名手本忠臣蔵」(3月)、「菅原伝授手習鑑」(9月)、「義経千本桜」(10月)という浄瑠璃物の三大名作の通し上演が歌舞伎座であったことだ。コロナ禍もあって久々の通しになり、中堅、若手が大役に挑戦する公演ともなった。

「仮名手本忠臣蔵」はA、Bにわけ、主要な役を役代わりで上演。昼は「大序」から「落人」まで。若狭之助は尾上右近が直情さ、松也は生真面目

さを見せ、顔世御前では時蔵が愁い、孝太郎が品位を示した。塩治判官では菊之助(八代目菊五郎)が師直の攻撃の理由がわからないままに怒りを募らせていく姿を品格を保って見せ、勘九郎はまっすぐな気性ゆえに師直の屈折した感情に戸惑い、我を失っていく過程を丁寧に表現。師直は芝翫に大きさと色気があり、判官への挑発がたくみで、松緑は嫌みさの中に愛嬌を出した。

由良之助は仁左衛門に判官への情愛がうかがえ、短い対面で思いを受け止めたことを示した。松緑は血気に逸る若侍を押しとどめる力強さを見せた。

夜は「五段目」から「十一段目」まで。「五、六段目」の勘平は菊之助(八代目菊五郎)が端正で切腹に至るまでの葛藤を細やかに表現、勘九郎は徒党入りへの切望と義父を殺したと思込んだ動揺をよく伝えた。おかるは時蔵が勘平への強い思いを出し、七之助は地味な姿の中に艶やかさを漂わせた。「七段目」の由良之助は仁左衛門が遊び慣れた風情の中で絶妙に本心をのぞかせ、愛之助が遊び人らしさと敵討ちへの思いを出した。おかるは七之助が媚態を見せつつ勘平への一途さを示し、時蔵は偽りの身請け話での喜びに勘平への愛を見せた。平右衛門は松也がおかるを前にしての揺れる思いを奴らしい明るさで見せ、巳之助がおかると呼吸の合ったやりとりを見せた。

9月は「秀山祭大歌舞伎」での「菅原」の通し。A、Bプロにわけ、主要な役を役代わりでみせた。昼は菅丞相失脚を中心に据えた「加茂堤」「筆法伝授」「道明寺」。菅丞相はあたり役とする仁左衛門が神々しさの中に深い情をのぞかせた。初役の幸四郎も松嶋屋型での上演で品位を表現。夜は丞相周辺の悲劇がモチーフの「車引」「賀の祝」「寺子屋」。桜丸は時蔵、八代目菊五郎がともに品格と哀れさを表現。「寺子屋」は寺入りからの上演。

松玉丸は松緑が首を小太郎と確認した後の

悲しみを細やかに表現し、幸四郎は敵役然とした前半と本心を見せての後半で人物の輪郭をくっきりと描き出した。千代は萬壽が子への愛情と覚悟の強さを示し、雀右衛門が優しさと性根の強さを示した。源蔵は幸四郎が忠義一途の人物像を見せ、染五郎が覚悟を感じさせた。戸浪は孝太郎が武家女房らしい毅然さ、時蔵が夫と寺子への情を感じさせた。

10月の「義経千本桜」は3部制。A、Bにわけて主要役を役代わりで上演した。1部は「鳥居前」「渡海屋」「大物浦」。佐藤忠信に化けた源九郎狐は團子と巳之助。渡海屋銀平実は新中納言知盛は隼人が舞台ぶりの大きさと悲愴美、巳之助が安徳帝への思いと覚悟を示した。典侍の局は孝太郎で安徳帝への情愛と強さの両面を見せた。

2部は「木の実」「小金吾討死」「すし屋」。権太は松緑が音羽屋型で愛嬌と妻子への思いを表現、仁左衛門は上方式をベースにしつつ自身が工夫を加え、妻子への情を細やかに示した。弥助は萬壽で気品を示した。

3部は「吉野山」「川連法眼館」。狐忠信は團子が二世猿翁型で動きに切れがあり、尾上右近が音羽屋型で親への情を細やかに示した。

中堅、若手とのダブルキャストにより三大名作すべてで主役を勤めた仁左衛門の活躍が目立った。

歌舞伎界を題材にした映画「国宝」(李相日監督、吉田修一原作)が6月の封切り以来、観客動員1336万7874人(2026年1月4日まで、東宝発表)の観客動員と実写の邦画では過去最高となる188億59462600円(同)の興行収入を記録したこともあり、歌舞伎への関心が高まった。一方で2026年5月末で大阪松竹座が閉館することが発表された。また入札不成立により国立劇場の建て替えの予定も立っていない。

歌舞伎演目ではここ数年の傾向ではあるが、新作の発表が目立った。

歌舞伎座の1月の昼は巳之助の五郎、米吉の十郎という若々しい配役の「対面」に続いて夢枕獮作「陰陽師」を原作とした二本。「大百足退治」(今井豊茂脚本)は松緑の藤原秀郷による大蜈蚣の魂魄退治。「鉄輪」(戸部和久脚本)は幸四郎の安倍晴明が勘九郎の源博雅を相棒に鬼と化した壱太郎の徳子姫と白鸚の蘆屋道満と対決。「封

印切」は鴈治郎と扇雀が忠兵衛と八右衛門を役代わりで。孝太郎の梅川に情味。

夜の序幕は「熊谷陣屋」。本役では初演の松緑の熊谷を萬壽の相模、雀右衛門の藤の方が支えた。「二人腕久」は尾上右近の腕屋久兵衛と壱太郎の松山が呼吸の合った鮮やかな所作を見せた。最後が新作の「大富豪同心 影武者 八巻卯之吉篇」(幡大介原作、戸部和久脚本、幸四郎演出、尾上菊之丞演出・振付)。テレビでも同じ役を演じる隼人が町奉行所同心卯之吉と將軍の弟幸千代の二役。

2月は「猿若祭二月大歌舞伎」。昼の序幕は巳之助の不破、隼人の名古屋、児太郎の茶屋女房の「鞆当」。中幕が「醜翻の花見」(中内蝶二作、今井豊茂脚本)で梅玉の秀吉、魁春の北の政所、雀右衛門のまつ、福助の淀殿らによる舞踊劇。最後が「きらら浮世伝」(横内謙介脚本・演出)。勘九郎の葛屋重三郎が弾圧されても立ち上がる負けん気と情熱を見せ、七之助の遊女お篠への秘められた思いが色を添えた。

夜の序幕が玉三郎のあたり役「阿古屋」。中幕が舞踊「江島生鳥」で、菊之助(八代目菊五郎)が生島新五郎で物狂いになって江島を恋する切なさ、七之助が2役で幻の江島を優美に島の海女を愛らしく見せた。最後が「人情斬文七元結」。勘九郎の長兵衛は動きの切れが良く、直情ぶりを示した。七之助のお兼は台詞の強弱がきき、萬壽の角海老女房の情と非情のバランスが絶妙。

4月は「四月大歌舞伎」。昼の序幕が新作歌舞伎「木挽町のあだ討ち」(永井紗耶子原作、齋藤雅文脚本・演出)。直木賞・山本周五郎賞をダブル受賞した原作の初歌舞伎化。父の敵を討つために国を出て江戸の森田座に身を寄せた伊納菊之助が仇討を達成するまでの芝居者との人間模様が描かれる。染五郎の菊之助が懊悩と純粋さを繊細に見せ、仇とされる作兵衛の中車が武骨さと好人物ぶりを感じさせた。幸四郎、又五郎、弥十郎、雀右衛門、猿弥、壱太郎と周囲の人物もよく描かれた秀作。

続いて「黒手組助六」。幸四郎が権九郎で滑稽さ、助六で颯爽ぶりを示し、芝蕪の鳥居新左衛門が堂に入った敵役ぶりで、魁春の揚巻が立女方の風格。

夜の序幕が「彦山権現誓助剣『杉坂墓所』」『毛

谷村』。六助はダブルキャスト。仁左衛門は陽性で舞台ぶりが大きく、幸四郎は実直さと愛嬌を見せた。孝太郎のお園は六助が許婚と気付いてからの変わり方が鮮やか。中幕が尾上右近の「鏡獅子」。弥生は小道具の扱いがたくみで上体の形の極まりが優美。後シテは獅子の精らしいきびきびした動きを見せた。最後が新作歌舞伎「無筆の出世」(竹柴潤一脚本、西森英行演出)。神田松鯉の口演が元の講談種。字が読めないために命を奪われる寸前であった治助が夏目左内と出会ったことで一念発起し、勘定奉行にまでおぼる。治助は松緑と坂東亀蔵、左内は中車と松緑の役代わり。松鯉の実演で間をつなぐ転換がスピーディー。

5月は八代目菊五郎、六代目菊之助襲名演目演目があり、昼の序幕が「壽式三番叟」で松也、歌昇、萬太郎、尾上右近、種之助の五人が澁漕と踊った。続いて「勸進帳」。團十郎の弁慶が力強く、八代目菊五郎の富樫との問答に緊迫感が生れた。梅玉の義経に気品。「大川端」は時蔵のお嬢吉三の台詞の切れが良く立ち姿が美しい。彦三郎のお坊吉三、錦之助の和尚吉三。夜の序幕が「五斗三番叟」。松緑の五斗兵衛は酔っていく姿がおおらかで竹田奴とのからみも軽妙。

6月は八代目菊五郎、六代目菊之助襲名演目以外は昼が舞踊二題。尾上右近の出雲の阿国、隼人の山三が好一對の「元禄花見踊」、仁左衛門の鳶頭、孝太郎の芸者の「お祭り」。夜の序幕は「暫」。團十郎の権五郎は舞台ぶりが大きく明るい。芝翫の清原武衡がしっかりとした受け。「芝浜革財布」は松緑の政五郎が好人物ぶりを発揮し、萬壽のおたつは夫を偽る心苦しさを時に示す世話女房らしい温かさ。

7月は「七月大歌舞伎」。昼は「新歌舞伎十八番」の四本立て。序幕は「大森彦七」(石川耕土補綴)。右團次の彦七は剛直で廣松の千早姫への「物語」が明瞭で狂乱の所作が力強い。「船弁慶」は團十郎の静御前と新中納言知盛の霊。知盛の霊に不気味さ。「高時」は巳之助の北条高時。気短さと鬱屈がうかがえ、田楽舞の動きが良い。「紅葉狩」は團十郎の更科姫実は戸隠山の鬼女。鬼女になったの幸四郎の維茂との立ち回りに見応え。

夜は序幕が新作歌舞伎「鬼平犯科帳 血闘」(池波正太郎作、幸四郎構成・演出、戸部和久脚

本・演出)。幸四郎の長谷川平蔵。染五郎演じる若き日の平蔵と現在の平蔵が重ね合わせて描かれた。最後が「蝶の道行」染五郎の助国と團子の小槇の若き二人の顔合わせ。

8月が「八月納涼歌舞伎」。3部制で1部の序幕が「男達ばやり」(池田大伍作、織田紘二演出)。巳之助の町奴の朝日奈三郎兵衛と隼人演じる旗本奴の三浦小次郎の意地の張り合いのてん末。続いて幸四郎、勘九郎による舞踊二題。「猩々」では二頭の酔態、「団子売」では夫婦の呼吸の合った姿を見せる。2部の序幕は「日本振袖始」(玉三郎監修)。七之助が岩長姫で艶やかさと酔態の所作をうまく見せた。続いて「火の鳥」(竹柴潤一脚本、原純、玉三郎演出・補綴)。父の大王(幸四郎)の命令で染五郎のヤマヒコと團子のウミヒコは永遠の命を求めて火の鳥(玉三郎)を探す旅に出る。吉松隆の音楽に乗せ、映像と紗幕を用いた兄弟の道中が美しい。最後が新作歌舞伎「野田版 研辰の討たれ」(木村錦花作、平田兼三郎脚色、野田秀樹脚本・演出)。久々の再演で配役が若返った。勘九郎がみずるいが憎めない辰次を絶妙な台詞回しと軽やかな所作でみせた。

11月が「吉例顔見世大歌舞伎」。昼の序幕が「御撰勸進帳 安宅の関」(利倉幸一補綴)。巳之助の弁慶は線がたく稚氣に富み、豪快さがあった。続いて舞踊「新口村」。死を決意した梅川(雀右衛門)と忠兵衛(扇雀)の心情を清元に乗せて両者が静かにはかなく見せた。その次が「鳥獣戯画絵巻」(北條秀司作、藤間勘右衛門演出)。鳥羽僧正(七代目菊五郎)描く鳥獣たちの舞踊劇。猿僧正(松緑)に男蛙(芝翫)と女蛙(萬壽)を討たれた蛙たちが復讐を果たすまでを兎、狐などを交えて描く。男性群舞の魅力が発揮された。最後が「御所五郎蔵」。愛之助の五郎蔵は前半はさっそうと、皐月(時蔵)の縁切りでは怒りを募らせるようすをうまく見せた。松緑の土右衛門が強さを出し、時蔵は真実を打ち明けられない苦悩を表現。夜の序幕が曾我物の舞踊仕立て「當年祝春駒」。続いて三谷幸喜作・演出の新作「歌舞伎絶対続魂(ショウ・マスト・ゴー・オン)幕を閉めるな」。伊勢の芝居小屋での「義経千本桜 川連法眼館」の無断上演を控えた座元(愛之助)、狂言作者(幸四郎)、頭取(鷹治郎)らが繰り広げる騒動。劇中劇の「川連法眼館」など

舞台機構を駆使したテンポが速く楽しめる舞台。

12月は「十二月大歌舞伎」。3部制で1部が獅童とバーチャルシンガー初音ミクが中心になる超歌舞伎「世界花結詞」(松岡亮脚本、藤間勘十郎演出・振付)。源氏を滅ぼす陰謀を企む藤原純友の遺児、鬼童丸(歌昇)と源頼光(獅童)、袴垂保輔(獅童二役)らの戦い。映像と「関の扉」「土蜘蛛」など古典を題材にした場面が組み合わせられる。

2部の序幕が「丸橋忠弥」(竹柴潤一補綴、西森英行演出)。黙阿弥作品の筋をわかりやすく通した。松緑の忠弥は酔態の中に見せる鋭さが後の場の謀反表明へとつながる。立ち廻り(立師・咲十郎)に新味と迫力。続いて「芝浜革財布」。獅童が政五郎を愛きょう豊かに造形。寺島しのぶのおたつが夫思いの世話女房ぶり。

3部の序幕が「源氏店」。玉三郎のお富に修羅場をくぐってきた凄みと強さ。染五郎初役の与三郎は身を持ち崩した若旦那らしい甘さ。最後が「火の鳥」の再演。大王が中車に変わった。

国立劇場の1月公演は新国立劇場での「彦山権現督助剣」(国立劇場文芸研究会補綴)の通し。「毛谷村」に原作に基づいた前後を付け、明智光秀の亡霊(又五郎)を出すなど脚色を加えて筋を通した。菊之助(八代目菊五郎)の六助は「杉坂墓所」で実直さを印象付け、「毛谷村」で思慮深さを見せた。時蔵のお園は「瓢箪棚」での京極内匠(彦三郎)との鎖鎌を用いた立ち廻りに緊迫感を出し、六助が許婚と知っての軟化に恥じらいと色気が感じられた。彦三郎が徹底した悪人ぶり。吉幸のお幸は武家女房らしい毅然さ。

6月は歌舞伎鑑賞教室で会場はサンパール荒川。「歌舞伎のみかた」と「土屋主税」。

7月は歌舞伎鑑賞教室で会場はティアラこうとう大ホール。「歌舞伎のみかた」と「かさね」。

9月は新国立劇場を会場に「仮名手本忠臣蔵」。加古川本蔵を軸にした上演。「二段目 桃井館」では鷹治郎が若狭之助の気短さと直情ぶりを怒りの演技で印象付けた。扇雀は戸無瀬で義理の娘である小浪(玉太郎)への気づかいを示した。「九段目 山科閑居」は「雪転し」からの上演。鷹治郎の由良之助はお石(門之助)に戯れかかる姿におおらかさとやわらかみがあり、扇雀はお石に対面しても引かない戸無瀬の心情を竹

本に乗せて表現。梅玉の本蔵は小浪への情愛を細やかに示し、すべてが娘可愛さからと感じさせた。

大阪松竹座は1月前半が「坂東玉三郎初春お年玉公演」。「口上」「地唄 残月」「長崎十二景」。後半が「片岡仁左衛門 坂東玉三郎 初春特別公演」。「於染久松色読販 土手のお六 鬼門の喜兵衛」「神田祭」。

2月が「立春歌舞伎特別公演」。昼が「十種香」「封印切」「幸助餅」、夜が「義経千本桜」で「大内」「堀川御所」「同扉外」「道行」「川連法眼館」「奥庭」。

5月が大阪・関西万博開催記念「薫風歌舞伎特別公演」。3部制で1部が「今昔歌舞伎草紙」「脈々奇書異聞 夢窓西遊記」、2部が「千夜一夜譚 荒神之巻」、3部が「鯉つかみ」。

7月が八代目菊五郎、六代目菊之助襲名披露「七月大歌舞伎」。昼が「野崎村」「羽根の禿・うかれ坊主」「髪結新三」、夜が「熊谷陣屋」「口上」「土蜘蛛」。八代目菊五郎が「うかれ坊主」を軽妙に、「髪結新三」の新三を色気と鋭さをもって勤め、「土蜘蛛」では僧智壽の不気味さを表現。六代目菊之助は「羽根の禿」を的確かつ愛らしく、「土蜘蛛」の胡蝶では美しい所作を見せた。

新橋演舞場は1月が「双仮名手本三升 裏表忠臣蔵」(石川耕士補綴・演出、藤間勘十郎演出・振付)。「仮名手本忠臣蔵」を素材に昼夜合わせて正味約4時間にまとめた。團十郎が由良之助、師直、定九郎、勘平の4役。昼は「大序」から「六段目」までに相当。山崎街道で撃たれるのが定九郎ではなく九太夫(九團次)というのが趣向。夜は加古川本蔵(梅玉)と由良之助が成り済ました偽本蔵が鉢合わせする「金谷宿本陣」に見応え。「勸進帳」の長唄に乗せ、両者が問答まがいの緊迫したやりとりを見せた。

7月が新作歌舞伎「刀剣乱舞 東鑑雪魔縁」(松岡亮脚本、尾上菊之丞・尾上松也演出)。人気ゲームを素材に名刀を擬人化した刀剣男士が活躍。鎌倉時代、三代將軍・源実朝の世に歴史改変をはかる時間廻行軍と三日月宗近(松也)率いる男士たちの攻防が描かれる。男士それぞれに作成された時代と場所、所持した人間の影響による性格付けがなされているのが特徴で趣向として面白い。

南座は3月が「三月花形歌舞伎」。松と桜のプログラムに別れ、前後半で昼夜の公演を入れ替

え。松が「三笠山御殿」「お染の五役」。桜が「伊勢音頭恋寝刃」「お染の五役」。

5月が「歌舞伎鑑賞教室」で「歌舞伎のお嘶」「相生獅子」。

6月初旬が「坂東玉三郎×春風亭小朝 南座特別公演」で「対談」落語芝居 怪談牡丹燈籠一御札はがし「越路吹雪物語」。中旬が「坂東玉三郎特別公演」で「口上」「地唄 残月」「映像 夢二慕情」「長崎十二景」。

8月下旬が「刀剣乱舞 東鑑雪魔縁」。

9月が「流白浪燦星」(モンキーパンチ原作『ルパン三世』より、戸部和久脚本・演出)。

10月が「市川團十郎特別公演」。昼が「伊達鏡阿國戯場 三升先代萩」、夜が「二人藤娘」「ご挨拶」「車引」「荒事絵姿化粧鑑」。

12月が八代目菊五郎、六代目菊之助襲名披露の「吉例顔見世興行」。昼が「醍醐の花見」「一條大蔵譚 檜垣・奥殿」「玉兎・鶯娘」「俊寛」、夜が「寿曾我対面」「口上」「弁天娘女男白浪 浜松屋見世先・稲瀬川勢揃」「三人形」。

博多座は2月が「歌舞伎NEXT 臚の森に棲む鬼」。

6月が「六月博多座大歌舞伎」。昼が「引窓」「お祭り」「福叶神恋嘶」、夜が「菅原伝授手習鑑 道行詞の甘替」「怪談乳房榎」。

8月が「刀剣乱舞 東鑑雪魔縁」。

10月が「市川團十郎特別公演」。昼が「伊達鏡阿國戯場 三升先代萩」、夜が「二人藤娘」「ご挨拶」「車引」「荒事絵姿化粧鑑」。

御園座は4月が「市川團十郎特別公演」。昼夜同一演目で「演奏」「男伊達花廊」「釣女」「迦具土之舞」。

10月が八代目菊五郎、六代目菊之助襲名披露の「吉例顔見世」。昼が「操り三番叟」「葛の葉」「京鹿子娘二人道成寺」。夜が「羽衣」「口上」「鼠小僧次郎吉」。

浅草公会堂の1月は「新春浅草歌舞伎」。1部が「絵本太功記 尼ヶ崎閑居」「落人」。2部が「春調娘七種」「絵本太功記 尼ヶ崎閑居」「棒しばり」。

ほかに4月が「四国こんぴら歌舞伎大芝居」。1部が「毛谷村」「魚屋宗五郎」、2部が「蜘蛛の拍子舞」「らくだ」。

9月が「永楽館歌舞伎」で「寿曾我対面」「口上」「神の鳥」。

10月が「立川立飛歌舞伎特別公演」で「連獅子」「新説小栗判官」。

10、11月は巡業の全国公立文化施設協会主催「松竹大歌舞伎」。「泥棒と若殿」「お祭り」。

自主公演・勉強会は5月に浅草公会堂で橋之助、福之助、歌之助の三兄弟による「神谷町小歌舞伎」。「弥生の花浅草祭 神功皇后と武内宿禰、三社祭、通人・野暮大尽、石橋」「義経千本桜川連法眼館、奥庭」。

7月に国立文楽劇場、浅草公会堂で尾上右近の「研の會」。「盲目の弟」「弥生の花浅草祭 神功皇后と武内宿禰、三社祭、通人・野暮大尽、石橋」。

同月に喜多能楽堂で京蔵の「青嵐の會」主催による「新版 山月記」。

8月に浅草公会堂で「稚魚の會・歌舞伎会合同公演」。「引窓」「棒しばり」「勢獅子」。

同月に同公会堂で「音の會」。鳴物・長唄「浦島」、長唄「綱館」、長唄「神田祭」、義太夫「道行旅路の嫁入」。

同月に国立文楽劇場で「上方歌舞伎会」。「土佐将監閑居」「太刀盗人」。

9月に浅草公会堂で鶴松の自主公演「鶴明会」。「仮名手本忠臣蔵 五段目、六段目」「雨乞狐」。

10月に浅草公会堂で鷹之資の勉強会「翔之會」。「奴道成寺」「弥生の花浅草祭 神功皇后と武内宿禰、三社祭、通人・野暮大尽、石橋」。

前進座は5月にサンシャイン劇場で新作歌舞伎「裏長屋騒動記」(山田洋次監修・脚本、小野文隆演出)を上演した。

仁左衛門が文化勲章、魁春が芸術院会員に選ばれた。尾上辰緑が1月、片岡我當が5月、尾上扇緑が7月、片岡亀蔵が11月に亡くなった。

こだま・しょうこ

演劇ジャーナリスト。著書に『芝翫芸模様』(集英社)、『二代目 聞き書き中村吉右衛門』(朝日文庫)、『完本 中村吉右衛門』(朝日新聞出版)、『艶やかに 尾上菊五郎聞き書き』(毎日新聞出版)、『楽しく波瀾万丈 浜木綿子聞き書き』(JTBパブリッシング)。

[商業演劇]

2025年の商業演劇

広瀬 登

2025年の商業演劇を巡る大きなトピックの一つが、老朽化した二代目帝国劇場の閉場(2月)であろう。1966年に開場した劇場は「芸術性と大衆性」を両輪とした、日本の商業演劇の殿堂であった。「ラ・マンチャの男」「レ・ミゼラブル」「エリザベート」といったミュージカルはもとより、「鹿鳴館」「喜劇 売らいでか!」「キングダム」などストレートプレイも数多く上演された。

三代目の帝劇は2030年度の完成予定。小堀哲夫の設計で、デザインコンセプトは「THE VEIL」。建物が美しさや神秘性をペールのようにまとうイメージを思い描いているという。客席数は約2000席で二代目と同規模ながら、より舞台が見やすくなるよう、ゆとりのある座席を整備する。

もう一つの話が、2026年5月をもって大阪松竹座が閉場すると松竹から8月に発表されたこと。設備の老朽化に伴うもので、建て替えを含めたその後の計画は未定。大阪における歌舞伎などの興行は「場所を変えて、さまざまな劇場やホールで継続する」としている。かつて栄えた道頓堀の芝居町の風情を伝えるシンボリック存在だけに閉館が惜しまれ、劇場存続を訴える署名活動も行われている。

一方で、梅田芸術劇場などは5月、JR東京駅前に約1300席の劇場を2029年に開場すると発表。テレビ朝日は9月、東京・有明南地区で手がける「TOKYO DREAM PARK」を2026年3月に開業するとアナウンスした。後者は約1500席の劇場「EXシアター有明」などを備えた複合型エンターテインメント施設。劇場の新陳代謝が進み、最新の映像・音響技術を駆使できる環境が整う中、近年すでにアートの現場で広まる「イメージヴ(没入感のある)」要素を演出に取り入れた演劇作品も生まれている。今後、新たに誕生する劇場が、演劇の地平線をさらに広げていくことを期待したい。

創業130周年を迎えた松竹では、新橋演舞場

が1月、市川團十郎一座の「初春大歌舞伎」で開場100周年イヤーの幕開け。2月は、新派喜劇公演「三婆」(2月1～9日)が水谷八重子、波乃久里子、渡辺えりのトリオで上演された。続いて、SUPER EIGHTの丸山隆平が座長を務めた「浪人街」(2月20日～3月16日)。昭和初期の同名映画(山上伊太郎脚本・マキノ正博監督)を倉持裕の脚本で舞台化。演出は一色隆司。丸山のほか玄理、入野自由、藤野涼子、佐藤誓、神保悟志、板尾創路らが、安政時代の江戸のアンダーグラウンドに生きる人々にふんした。

5月は、「反乱のボヤージュ」(5月6～16日)。野沢尚の小説を、鴻上尚史の脚本・演出で舞台化した。大学の学生寮を舞台に、大人社会と対峙する若者達の葛藤と成長を描いた。元機動隊員の舎監役に石黒堅、学生役に岡本主人やSTAROジュニアの大内リオンら。6月はシリーズ第11弾となる東京喜劇「熱海五郎一座」(6月2～27日)。吉高寿男の作。「黄昏のレストラン～復讐はラストオーダーのあとで～」と題して、三つ星を狙うレストランで起こる悲喜こもごもの爆笑劇。座長の三宅裕司はじめ渡辺正行、ラサール石井、小倉久寛、春風亭昇太、東貴博らおなじみのメンバーに加え、羽田美智子と剛力彩芽をゲストに迎えた。

7月は、歌舞伎の新作「刀剣乱舞 東鑑雪魔縁」。8月は、有吉佐和子の名作「華園青洲の妻」(8月1～17日)。初役となった大竹しのぶの加恵と田中哲司の青洲、先行する京都・福岡両公演での休演(代役は文学座の小野洋子と名越志保)から復帰した波乃久里子の於継が嫁姑のドラマを好演。波乃が公演期間終盤、再び体調不良により休演(代役は名越)したのが惜しまれる。続くは、OSK日本歌劇団「レビュー 夏のおどり」(8月22～26日)。月末は、舟木一夫の「シアターコンサート」(8月27～30日)。

9月は、「ANDO」(9月5～28日)。橋本涼はじめSTAROの「B&ZAI」メンバーを中心にした青春群像劇。10月は、「星列車で行こう」(10月4

～26日)。真山仁の脚本、坂東玉三郎演出・補綴の舞台の再演。主演の影山拓也(IMP.)ほか、松田悟志や松村龍之介、石井一孝らが出演。夜空を行く「幻の列車」に人生の岐路に悩む人々が乗り込み、やがて希望を見出していく様が、往年の名曲とともに紡がれた。

一年を締めくくったのは、「いのうえ歌舞伎爆烈忠臣蔵～桜吹雪 THUNDERSTRUCK」(11月9日～12月26日)。中島かずきの作、いのうえひでのりの演出。江戸時代、歌舞伎の「忠臣蔵」を上演するために情熱を傾け奔走する人々が描かれた。劇団☆新感線の45周年記念興行を銘打つだけあって、これまで劇団が上演してきた作品へのオマージュも盛り込まれた。古田新太、橋本じゅん、高田聖子、栗根まこと、羽野晶紀、橋本さとしといった古参メンバーも勢揃い。これまで同劇団公演に登場している小池栄子、早乙女太一、向井理も客演し節目を祝った。

三越劇場では、「おちか奮闘記」(1月2～26日)で新年がスタート。川口松太郎の原作。明治初期の大阪で、義太夫節三味線方・豊澤団平の芸に惚れて妻となったおちかが、人形浄瑠璃「壺坂靈験記」を完成させるまでを描いた。おちかを演じたのは丘みどり。歌手デビュー20周年の記念の年に舞台初主演となった。団平役の三田村邦彦をはじめ、河合雪之丞、賀集利樹、松本慎也、瀬戸摩純らが集った。

6月には、「花嫁～娘からの花束～」(6月1～24日)。向田邦子作、石井ふく子演出。1977年に初放送され、以来リメイクが繰り返されたテレビドラマを原作にした一家族の心温まる物語。還暦を過ぎても恋のときめきを忘れない主婦・ちよを久本雅美が演じ、羽場裕一、小林綾子、丹羽貞仁、上脇結友、瀬戸摩純、石原舞子らが脇を固めた。

サンシャイン劇場では、「あの夏、君と出会えて～幻の甲子園で見た景色～」(8月23～31日)。羽原大介作、木村弥寿彦演出。コロナ禍で甲子園への夢を絶たれた元高校球児が1942年にタイムスリップ。太平洋戦争中の若者たちと「幻の甲子園」出場のため、再び青春を燃やすファンタジー。STARTOの藤井直樹が主演。同ジュニアの岡崎彪太郎をはじめ若いキャストが躍動した。また、日生劇場ではミュージカル「ビー

トルジュース」の再演(5月)があった。

東宝は2月、閉場を前にした帝国劇場でCONCERT「THE BEST New HISTORY COMING」(2月14～28日)を開催。1966年以来、350以上の作品が上演された二代目帝劇の掉尾を飾るガラコンサートとなった。井上芳雄や浦井健治、甲斐翔真や島田歌穂らレギュラー出演陣が、鹿賀丈史や大地真央、市村正親や堂本光一、鳳蘭や前田美波里ら劇場ゆかりの俳優を日替わりで迎え、往年の名曲が披露された。

帝劇建て替え期間中の代替劇場の一つが明治座。「屋根の上のヴァイオリン弾き」(3月)、「1789—バステューユの恋人たち—」(4月)、「二都物語」(5月)のミュージカル3作品が再演された。ほかに東宝のミュージカルでは、日生劇場で「Once」(9月)、「SPY & FAMILY」(10月)、「十二国記一月の影 影の海一」(12月)、東急シアターオーブで「ケイン&アベル」(1～2月)、「エリザベート」(10～11月)、東京建物BrilliaHALLで「ダンス オブ ヴァンパイア」(5月)、「梨泰院クラス」(6月)の公演があった。

シアタークリエもミュージカルが中心だった。「ヒーロー」(2～3月)、「ボニー&クライド」(3～4月)、「ジャージー・ボーイズ」(8～9月)、「バグダッド・カフェ」(11月)、「ダディ・ロング・レッグズ」(12月～2026年1月)。舞台と客席の関係が親密な劇場空間を生かした良作が並んだ。

ほかには、1月は、「プレミアム音楽朗読劇 VOI CARION XIX ～スプーンの盾～」(1月4～30日)。原作・脚本・演出は藤沢文翁、作曲・音楽監督は小杉紗代。「世界一美味しい戦争」を描く人気シリーズ。再々演となる今作は、料理の力でフランスを救った男の物語。大塚明夫や山寺宏一、緒方恵美や潘めぐみら人気声優が出演した。

5月は、ノエル・カワード作「陽気な幽霊」(5月3～29日)。熊林弘高の演出。小説家の男とその新旧の妻、そして怪しげな霊媒師が織りなす劇作家の代表作。小説家役を田中圭、幽霊となって現れるその死んだ妻役を若村麻由美、新妻役を門脇麦、霊媒師役を高畑淳子という人気俳優がそれぞれ務め、脇にはいづれも芝居巧者の天野はな、あめくみちこ、佐藤B作が揃った。笑いの中に、愛する人を失った悲しみと再会へ

の念がにじむコメディ―舞台となった。

6月は、前半が「Nostalgic Cabaret」(6月2～10日)。昭和から平成の邦楽ヒットソングに焦点を当てたコンサート。演出は原田薫。ミュージカルで活躍する加藤和樹、星風まどか、内海啓貴、霧矢大夢がレギュラー出演し、朝夏まなとや廣瀬友祐、香寿たつきや白川裕二郎(純烈)、斉藤由貴らを日替わりゲストに迎えた。後半は、「“ever” Naoto Kaiho Stage Entertainment Activities 30th Concert」(6月16日～7月7日)。海宝直人の舞台芸能生活30周年を記念したスペシャルコンサート。

7月は、ふぉ～ゆ～ meets 梅棒「Only 1, NOT No.1」(7月13日～8月3日)。人気アイドルグループと、ダンスエンターテインメント集団「梅棒」がコラボレートした。全編セリフなし(ノン・バーバル)のダンス・パフォーマンス。歌舞伎町のホストクラブ同士の熾烈なバトルを、J-POPのヒット作に乗せながら踊った。

10月は、音楽劇「エノケン」(10月7～26日)。ホリプロとの共同製作。「日本の喜劇王」と呼ばれた榎本健一の人生を、又吉直樹が新作戯曲として書き下ろした。演出はシライケイタ、作曲・音楽監督は和田俊輔。市村正親のエノケン。小さなレビュー劇団で注目され、やがて一座の座長となり人気を謳歌するも、晩年は病魔に襲われ苦悩するその人生を、情熱的かつ繊細に体現した。エノケンの二人の妻に扮した松雪泰子、息子役をフレッシュに演じた本田響矢をはじめ、小松利昌、斉藤淳、三上市朗、豊原功輔と脇も揃った。

また、12月にはTHEATER MILANO-Zaで、「キャッシュ・オン・デリバリー」(12月5～21日)が上演された。マイケル・クーニー作のコメディ―。小貫流星の演出。King Gnuのメインボーカルである井口理の初舞台、社会保障手当を不正受給する怪しい男に扮した。矢本悠馬演じる相棒とともに、嘘に嘘を重ねたあげく窮地に陥ってしまうその様を全身で体現、客席を湧かした。高木渉や小松和重らベテランも好演。

明治座は、新年を「純烈」公演(1月7～28日)で幕開け。芝居とコンサートの二本立て。第1部は「俺たちはダディじゃねえ!」(横山一真作、村上大樹演出)では、酒井一圭、白川裕二郎、後

上翔太、岩永洋昭の4人組に、谷花音、曾我廼家寛太郎、小林綾子らが加わり、1950年代のアメリカを舞台にしたコメディ―を披露。第2部では、ムード歌謡コーラスグループの真髓を發揮、岩永の卒業(3月末)を前に集った老若男女のファンを盛り上げた。「氷川きよし 25周年記念劇場コンサートツアー ～絆～ in 明治座」(1月29～31日)、「細川たかし一門コンサート in 明治座2025」(2月2日)、「吉幾三特別公演」(2月7～24日)が続いた。

6月は、舞台「サザエさん」(6月5～17日)。国民的人気漫画・アニメの舞台化。2019年に初演され好評を博し、2022年の第二弾に続く第三弾。田村孝裕の脚本・演出。「10年後のサザエさん」「タマがいなくなった」「磯野家の団欒」の3本立てで、藤原紀香のサザエ、葛山信吾のマスオ、高橋恵子のフネ、松平健の波平、酒井敏也のタマというおなじみの配役。カツオ役の草川直弥(ONE N' ONLY)と佐藤友祐(101)らが新たに一座に加わった。6月はほかに、「Godiego LIVE 2025! in MEIJIJA」(6月20、21日)、「Ms. OOJA 流しのOOJA 総集編 TOUR Final」(6月22日)、「福田こうへいコンサート2025」(6月23～25日)があった。

7月は、「五木ひろし特別公演 坂本冬美特別出演」(7月5～27日)。五木のデビュー60周年記念に坂本冬美を迎えた。芝居とスペシャルショーの2部構成で、第一部が「花のお江戸の快男児 喧嘩安兵衛」(作・小野田勇、演出・三木のり平、補綴・吉本哲雄、補綴と演出・金子良次)。コンサートは五木と坂本というトップ演歌歌手の競演。公演期間中、五木の病気体演があったが、応援ゲストとして吉幾三や里見浩太朗らが駆けつけ、座長の復活までフォローした。

8月は、舞台「ゲゲゲの鬼太郎2025」(8月2～16日)。原作は水木しげるの漫画。世界征服を目論む西洋妖怪の吸血鬼軍団との戦いを描いた(脚本・演出は堤泰之)。荒牧慶彦の鬼太郎、大塚明夫のねずみ男、上坂すみれのねこ娘、美弥りかの謎の女、浅野ゆう子の吸血鬼による娯楽舞台として、夏休み期間中の子どもたちも喜ばせた。下旬は、「水谷千重子50周年記念公演」(8月22日～9月7日)。芝居「CAKUGO(カクゴ) 愛と憎しみと追憶と沈黙のミス・フローレンス」と歌謡ステージ「千重子オンステージ」の2

部構成によるエンタメ舞台。

9月は、「梅沢富美男劇団 梅沢富美男役者人生60年 研ナオコデビュー55周年 水森かおりデビュー30周年 特別公演」(9月10～13日)。節目を迎えた3人のエンターテイナーがそろい踏み。人情芝居、歌謡オンステージ、舞踊ショーの3部構成で客席を楽しませた。「SHOW-WA&MATSURI コンサート2025 in 明治座」(9月14日)に続いたのは、「大逆転! 戦国武将誉賑」(9月20日～10月19日)。細川徹の脚本・演出。2023年の「大逆転! 大江戸桜誉賑」の好評を受け、松平健、檀れい、コロケ、久本雅美の4人の座長が再結集。奇想天外な時代劇ストーリーを軸に笑いに涙、歌にモノマネとありの舞台となった。

10月は、「また本日も休診～山医者うた～」(10月23日～11月2日)。見川鯛山「田舎医者シリーズ」を原作にした人情喜劇。田村孝裕の脚本・演出。那須高原を舞台に、柄本明が型破りな診療所の院長に扮した。今作は、将来を見据えたリゾート開発と自然への思いの狭間で騒動となった村の顛末記。渡辺えり、江口のりこ、佐藤B作、笹野高史、林翔太、市川美織らバラエティーに富んだキャストが集った。

11月は、「酔いどれ天使」(11月7～23日)。黒澤明の同名映画を蓬萊竜太の脚本で舞台化。敗戦後の闇市に生きる無頼者たちの物語。2021年の初演から演出とキャストを一新した。深作健太のエッジの効いた演出のもと、怖い物知らずの若いやくざ・松永を北山宏光が演じた。他の出演者には、酔っ払いの貧乏医師・真田役の渡辺大ほか、横山由依、岡田結実、阪口珠美、佐藤仁美、大鶴義丹が名を連ね、ピカレスクでありながら人間味豊かな舞台を生み出した。

12月は、日本テレビ製作の舞台「忠臣蔵」(12月12～28日)。堤幸彦の演出、鈴木哲也の脚本。上川隆也の大石内蔵助、藤原紀香のりく、高橋克典の吉良をはじめ、珠城りょうの阿久里・おかる、藤岡真威人の堀部安兵衛など大御所から中堅、若手まで豪華な配役。映像を使い、大道具は最小限にした演出だったが、それにより王道を行く忠臣蔵の物語と人間模様が際立った。

前進座は、初夏にサンシャイン劇場で「裏長屋騒動記」(5月30日～6月8日)。落語の「らく

だ」と「井戸の茶碗」をもとに山田洋次が脚本・演出した舞台の再演。松竹新喜劇の曾我廼家寛太郎をゲストに迎え、らくだの馬が上方から江戸の裏長屋を訪れ、大騒ぎを起こす物語に刷新。柳生啓介(屑屋久六)、嵐芳三郎(緋鯉の半次)、玉浦有之祐(高木作左衛門)、松宮美菜(お文)、河原崎國太郎(藩主 赤井綱正)、武井茂(千代田朴斎)という盤石な出演陣で、客席の笑いを誘った。

秋には、三越劇場で「笑いごとではありませんね!」(10月4～11日、全国巡演も)。朱海青の脚本、鶴山仁の演出。戦時下に「禁演落語」と「国策落語」の狭間で苦悩する落語家たちを描いた。随所にちりばめられた笑いの中にも、権力と芸術の関係性を巡る批判精神が光った。出演は、藤川矢之輔、新村宗二郎、浜名実貴、有田佳代、嵐芳三郎ら。ほかに、京都で「雪間草一利休の娘お吟」を上演。「人情噺 文七元結」「あかんべえ」「花こぶし」「松本清張朗読劇シリーズ」「くずへい 屑屋でござい」「雨ががる」が全国巡演した。

名古屋・御園座では、「ヴェニス商人」(1月)、「浪人街」(3月)、「市川團十郎特別公演」(4月)、「ダンス オブ ヴァンパイア」(6月)、「二都物語」(6月)、「吉例顔見世」(10月)、「Once」(10月)、「チ。 一地球の運動について」(11月)、「酔いどれ天使」(11月)などのほか、5月には「IMPACT」(5月1～25日)が上演された。滝沢秀明の構成・演出。滝沢が手塩にかけるアイドルグループ「IMP.」の初主演舞台。金沢、広島にも巡演した。

大阪松竹座は、「坂東玉三郎 初春お年玉公演」(1月)、「片岡仁左衛門 坂東玉三郎 初春特別公演」(1月)、「立春歌舞伎特別公演」(2月)、「薫風歌舞伎特別公演」(5月)、「七月大歌舞伎」(7月)といった歌舞伎公演に加え、「反乱のポヤージュ」(6月)や「あの夏、君と出会えて」(9月)、「ANDO」(10月)、「星列車で行こう」(10～11月)と東京からの引越越し公演があった。

松竹座ならではの公演では、3月に「関西ジュニア原石まつり」(3月8～30日)。「キラキラしとんの気のせいちゃうでえ〜!」を副題に、STARTOの関西ジュニアのメンバーが出演した。

4月は、「春だ! 笑いだ! 松竹新喜劇 陽春公演」(4月19～27日)。昭和100年の節目に、「二

階の奥さん」「人生双六」という懐かしい昭和の芝居の二本立て。後者では、映画「侍タイムスリッパー」で話題の田村ツトムをゲストに招き、人情喜劇が披露された。

5月は、「OSK日本歌劇団 OG公演 Forever Dream」(5月2、3日)。OSKのOGによるスペシャルレビュー。「Into the Memories」「ルネッサンス」「Everlasting Stars」の3部構成で、劇団の歴史を紡ぐ名曲と名場面を、嵯峨みさ緒、東雲あきらをはじめとする歴代スターと共に振り返った。

6月は「レビュー 春のおどり」(6月14～24日)。OSKのトップスター、翼和希のお披露目公演。第一部は「翔～Fly High～」(花柳寿楽の構成・演出・振付)。花鳥風月の世界を基調とした和物レビューショー。第二部は「The Legendary！」(中村一徳の作・演出)。宝塚歌劇団の人気演出家を迎え、新時代の幕開けを情熱豊かにことほいだ。

8月は、「東京ジュニア Next Generation 2025」(8月7～16日)。デビューを狙うSTARTOのジュニアたちが来阪しパフォーマンス。続く「Boys be 8 Summer Live」(8月22～31日)は、STARTOのジュニアグループ「Boys be」によるコンサート。

9月は、「松竹新喜劇 九月公演」(9月20～28日)。ゲストに松竹座初登場となる演歌界のプリンス、辰巳ゆうとを迎えた。「愚兄愚弟」「駕籠や捕物帳」の二本立て。

10月は、「大阪は踊る！」(10月4～12日)。高遠響の原作、江頭美智留の脚本、川浪ナミヲの演出。「ある日突然、道頓堀に石油が湧いた」という奇想天外なファンタジー小説の初舞台化。浜中中文一座長に、笑って踊るハッピーな舞台を繰り広げた。

11月は、「じゃりん子チエ」(11月15～25日)。はるき悦巳の人気漫画の久しぶりの舞台化。わかぎゑふが脚本を、村角太洋が演出を手がけた。チエに澤井梨丘、父のテツに波岡一喜、母のヨシ江に三倉茉奈。赤井英和、山本浩之、桐生麻耶らも出演し、昭和の大阪の人情喜劇を繰り広げた。

12月は、「スイートホーム ビターホーム」(12月6～14日)。藤井清美脚本の「お仕事コメディ」。家を通して見えてくるものとは？信

頼とは？本当の幸せとは？——とある住宅展示場のモデルハウスを舞台に、笑いの中に問うていく。主人公・努力良介役の中山優馬をはじめ、秋元才加、藤野涼子、佐藤アツヒロらが出演。金沢、東京でも上演された。

京都・南座では、歌舞伎公演である「三月花形歌舞伎」(3月)、「南座 歌舞伎鑑賞教室」(5月)、「坂東玉三郎×春風亭小朝 南座特別公演」(6月)、「坂東玉三郎特別公演」(6月)、「歌舞伎刀剣乱舞 東鑑雪魔縁」(8月)、「流白浪燦星」(9月)、「市川團十郎特別公演」(10月)、「吉例顔見世興行」(12月)、引っ越し公演である「三婆」(2月)、「浪人街」(4月)、「華岡青洲の妻」(7月)が上演された。

ほかには、1月に「初笑い 松竹新喜劇 新春お年玉公演」(1月2～8日)、「OSK 日本歌劇団 レビュー in Kyoto」(4月25～29日)、「京都五花街合同公演 都の賑い」(6月28、29日)、「松竹 上方喜劇まつり」(11月1～24日)などが催された。

福岡・博多座では、「天保十二年のシェイクスピア」(1月)、「松平健芸能生活50周年記念公演」(1月)、「朧の森に棲む鬼」(2月)、「レ・ミゼラブル」(4月)、「ウェイトレス」(5月)、「六月博多座大歌舞伎」(6月)、「新喜劇出前ツアー2025」(8月)、「ピーター・パン」(8月)、「前川清ファミリー劇場」(9月)、「水谷千重子50周年記念公演」(9月)、「また本日も休診」(10月)、「マタ・ハリ」(11月)などが上演された。

ひろせ・のぼる

東京都出身。2002年に毎日新聞入社。横浜、京都両支局を経て東京学芸部。演劇担当として歌舞伎、商業演劇、ミュージカル、現代演劇を取材。これまでテレビ、映画、美術などの担当も務めた。

[現代演劇]

2025年の現代演劇 一厳しい状況にある新劇の今

林 尚之

俳優の仲代達矢さんが92歳で亡くなった。映画、ドラマでも活躍したが、原点は演劇の人だった。劇団俳優座を経て、俳優養成の「無名塾」を主宰した。若い演劇人を育て、自ら設計にかかわった石川県七尾市の能登演劇堂を皮切りに無名塾の全国公演を行ってきた。最後の舞台は亡くなる5か月前まで能登演劇堂で上演されたブレイク作「肝玉おっ母と子供たち」。戦火の中で荷車を引いて戦場を回る、おっ母を力強く演じて、平和への思いを滲ませた。無名塾の拠点である「仲代劇堂」で葬儀が行われ、旅立った。最後まで「ザ・新劇人」だった。

そして、仲代さんも数多くの舞台に立った東京・六本木の俳優座劇場が4月で閉場した。1954年に俳優座によって建設されたが、俳優座だけでなく、数多くの新劇の劇団が公演を行った。最後の公演はシェークスピアの「嵐 THE TEMPEST」。俳優座をはじめ、文学座、青年座、文化座など多くの新劇俳優が出演した。老朽化のための閉鎖と思っていたが、2か月後に吉本興業の専用劇場として再オープンしたのは驚いた。さらに市村正親、役所広司、渡辺えり、演出家の鶴山仁ら多くの演劇人を輩出した専門学校「舞台芸術学院」も2026年3月に閉校し、77年の歴史に幕を閉じることが明らかになった。戦後の新劇を支えた名優の死と、新劇の象徴ともいえる劇場、そして演劇学校の閉場、閉校は、厳しい状況にある新劇の今を反映しているのかもしれない。

1980年代に三谷幸喜が率いた人気劇団「東京サンシャインボーイズ」が30年ぶりに復活した。解散ではなく「30年の充電期間に入る」との触れ込みだったが、一種の洒落と思われていた。しかし、三谷と元メンバーによる1度限りの復活公演「蒙古が襲来」は九州の島に蒙古軍が突然襲ってくる、ある一日を描いた作品で、チケットは完売だった。三谷の作・演出による「昭和から騒ぎ」(大泉洋、宮沢りえ)は、シェークスピアの「から騒ぎ」をベースに笑いに特化し

た舞台。13年ぶりに挑んだ三谷文楽「人形ざらゝい」は、憎まれ役の文楽人形を主人公に、人形がスケボーまで披露する異色文楽だった。

中堅の劇作家たちは良質な作品を上演した。長田育恵は、ポルトガルから来日した宣教師フロイスを主人公にした井上ひさしのラジオドラマ「わが友フロイス」をもとに、こまつ座で「フロイス—その死、書き残さず」(主演風間俊介)を書き下ろした。栗山民也演出で、フロイスが時代の波に翻弄されながらも、伝道続ける姿を描いた。俳優座に書き下ろした真鍋卓嗣演出「存在証明」は、英国の数学者が2つの世界大戦をはさんで、「リーマン予想」を証明しようと情熱を燃やす姿を描いた。ヘルマン・ヘッセの名作「シッダールタ」をベースにした白井晃演出「シッダールタ」(草薨剛)は仏教の始祖ブッダと同じ名を持つ青年の求道に至る苦闘を描いた。

昨年の「鶴屋南北戯曲賞」を受賞した劇団チョコレートケーキの古川健も精力的だった。トム・プロジェクトに米国の統治下にあった沖縄で米国の法廷闘争を行った魚屋のおばあを主人公にした「おばあとラッパのサンマ裁判」、戦後に米軍人と結婚し渡米した戦争花嫁の激動の半生を描いた「WAR BRIDE アメリカと日本の架け橋」(奈緒)、居場所を求めて「トー横」に集まってくる若者たちとその家族の姿を描く「Too Young」を書き下ろした。年末に上演された劇団チョコレートケーキ公演「三人の密偵」は、満州での張作霖爆殺事件を背景に、陸軍参謀本部将校、関東軍の密偵、中国国民党の諜報員という3兄弟の濃密なやり取りによる二人芝居「導火線」「IGNITION」「誘爆」三作品を一挙上演。一連の作品の演出は日澤雄介が担当した。

iakuの横山拓也は、シスカンパニーに書き下ろした寺十吾演出「やなぎにツバメは」(大竹しのぶ)は、老いを意識し始めたシニア世代の4人の愛と友情を描いた作品。iaku公演「はぐらかしたり、もてなしたり」は失踪した妻が久しぶりに帰ってきた夫婦の行き違いを軸に、様々な

恋愛模様をコメディタッチに描いた。可見市文化創造センターで作・演出した「ハハキのミュレット」は、後継者がいない棕桐箆作りを営む家族をめぐる葛藤と絆を描いた。

モダンスイマーズの蓬萊竜太は、東日本大震災のトラウマを抱え、生きづらさを感じている夫婦の10年の軌跡を描く「おどる夫婦」(森山未来、長澤まさみ)、スポーツをめぐる夢と挫折の物語「シャイニングな女たち」(吉高由里子)のほか、宗教二世の家族をめぐる「消えていくなら朝」は自らの演出で再演し、出演者はすべてオーディションで決めた。

2003年の旗揚げ以来、毎年注目すべき作品を上演してきた、前川知大率いる劇団「イクウム」が一旦、劇団活動の休止を発表した。最後の公演となった「ずれる」は、災害に襲われ、野生の動物が徘徊する架空の町を舞台に、一つの家で暮らす人間たちの生き方のずれ、価値観のずれなどを多層的に描いた。メンバーの安井順平はこの舞台の演技などで紀伊国屋演劇賞の個人賞を受賞した。

赤堀雅秋はプロデュース公演で「震度3」を作・演出した。ゴミ収集で働く男たちが、出口の見えない日常に、内に抱えた不満や怒りをさらけ出す。ハヤカワ『悲劇喜劇賞』を受賞した。

鈴木聡は主宰するラップ屋公演「はなしづか」で戦争に翻弄されながらも芸に励む落語家たちの群像劇を作・演出し、春風亭昇太、柳家喬太郎の人気落語家が出演した。佐藤B作が主宰する東京ヴォードヴィルショーに書き下ろした、佐藤演出「狐と南吉」は29歳で夭逝した童話作家新美南吉の半生を描いた。

ケラリーノ・サンドロヴィッチが、神奈川芸術劇場で作・演出した「最後のドン・キホーテ THE LAST REMAKE of Don Quixote」(大倉孝二)は、夢と妄想と正義感に取りつかれた人間が、現実と虚構の境界でみせる狂気と覚悟を描いた作品。

永井愛が、チェーホフの初期のミステリー小説をもとに脚本・演出した二兎社公演「狩場の悲劇」(溝端淳平)は、元予審判事セルゲイが新聞社に持ち込んだ小説をめぐる四つ巴の愛憎劇。

詩森ろばは、シリアル・ナンバーで上演した「YES MEANS YES」で望ましい性のあり方を模索する姿を描き、デヴィッド・ヘアー作で演

出した「The Breath of Life」は、ある男をめぐる元妻と元愛人の対話劇。

若手の活躍もあった。劇団た組の加藤拓也の「ここは海」(橋本淳、黒木華)はトランスジェンダーとその家族の物語。

ピンク地底人3号は、埼玉のクルド人コミュニティへの取材をもとにし、架空の町での在日外国人一家と日本人の衝突を描いた生田みゆき演出「燃える花嫁」、阪神大震災の被災者を主人公に、過去と現在のつながりから再生する姿を描く栗山民也演出「明日を落としても」(佐藤隆太)と、意欲的な舞台が続き、「明日を落としても」は鶴屋南北戯曲賞を受賞した。

2024年度の岸田戯曲賞を受賞した劇団アンバサンドの安藤奎が作・演出した「遠きに見てる」は、日常の些細なずれが増幅し、不穏な世界に引き込まれていく怖さを描いた。

評伝劇を手掛けている村田裕子の作・演出「穿つ泡」は「のらくろ」で知られる漫画家田河水泡の戦中・戦後の姿を描いた力作。

公共劇場では新国立劇場が、芸術監督の小川絵梨子が始めた、ワークショップを継続するなど時間をかけた舞台作りでこだわった「こつこつプロジェクト」による、三好十郎作、柳沼昭徳演出「夜の道づれ」は敗戦後の甲州街道をとぼとぼと歩く二人の男のロードムービー的な作品。スティーヴン・キヤラム作、桑原裕子演出「ザ・ヒューマンズ」人間たち」は感謝祭の祝いに集まった家族の会話から貧困、老いの不安、愛の喪失の悩みが浮き彫りとなる。1970年の大阪万博前後の焼肉屋を舞台に、在日朝鮮人の家族を描いた鄭義信作・演出「焼肉ドラゴン」を再演。韓国公演を経て、凱旋公演も行った。鄭は再演の「泣くロミオと怒るジュリエット」などと併せて、毎日芸術賞を受賞した。英国のサイモン・スティーヴンス作、上村聡史演出「スリー・キングダムス」は猟奇的な殺人事件をめぐる、国境を越えた犯罪と人間の暗部を描いたサスペンス。海外からの招聘公演では、チェコのカレル・チャペック作「母」は5人の息子を持つ母が戦争に翻弄される姿を描き、米国で活躍するアヤ・オガワ作・演出「鼻血」は、亡くなった父親との様々なエピソードを通し、父親との文化や世代間ギャップを描いた。

設備の更新工事などで1年ほど休館していた

東京芸術劇場が9月から再開場。次期芸術監督の岡田利規がディレクターを務めた舞台芸術祭「秋の隕石2025東京」では、一人芝居が相次いで上演され、佐々木蔵之介がルーマニアの演出家シルヴィウ・プルカレーテとタッグを組んだ「ヨナ」は運命に抗って自由を求める男を熱演。フランスの女優イザベール・ユペールによるロバート・ウイルソン演出「Mary Said What She Said」は、悲劇の女王メアリーの処刑前夜を描いたモノローグ。フロリアン・ゼレール作、ラディスラス・ショラー演出「飛び立つ前に」(橋爪功)は、死を目前にした老いた主人公と複雑に絡み合う家族の姿を描いた。

世田谷パブリックシアターでは、アラブ系アメリカ人女性とユダヤ系ドイツ人青年の出会いから、青年のルーツの秘密が明かされるワジディ・ムワド作、上村聡史演出「みんな鳥になって」、現実と幻想が交錯する父娘の物語を描く、アリスター・マクドウォール作、田中麻衣子演出の一人芝居「キャプテン・アメイズング」(松尾諭、田代万里生、近藤公園)、国境なき医師団メンバーなどへの取材をもとにした、ティアゴ・ロドリゲス作、生田みゆき演出のリーディング劇「不可能の限りにおいて」は、戦争や災害の現場での葛藤や矛盾を描き出した。

神奈川芸術劇場は、新ロイヤル大衆舎とタッグを組んだ火野葦平原作、斎藤雅文脚本、長塚圭史演出「花と龍」で、激動の時代を生きた荷役労働者たちの物語。

座・高円寺では、横浜ポートシアターの代表作「新版小栗判官・照手姫」が創設者遠藤琢朗の追悼公演として上演され、MODEの松本修演出、ブレヒト作「プンティラ旦那と下男のマッティ」は大地主とその運転手によるドタバタ喜劇、山谷典子作、藤井ごう演出の演劇集団Ring-Bong「交差点のプテラノドン」は、産婦人科クリニックをめぐる家族の葛藤劇。

彩の国さいたま芸術劇場では、蛭川幸雄から吉田鋼太郎が引き継いだシェークスピアシリーズ2ndの第二弾「マクベス」は、藤原竜也の狂気と弱さを体現した演技が際立った。

パルコ劇場は多彩な公演を行った。東京サンシャインボーイズ復活公演「蒙古が襲来」をはじめ、東西ドイツ統一をめぐる家族の物語であるドイツ映画を基にしたバルント・リヒテンベル

ク脚本、上村聡史演出「グッバイ、レーニン」(相葉雅紀)、名作「シラノ・ド・ベルジュラック」の作者を主人公にしたアレクシス・ミシャリク作、マキノノゾミ上演台本・演出「エドモン」(加藤シゲアキ)、変わりゆく社会と折り合いをつけようともがく家族を描く、ベスー・スティール作、栗山民也演出「星の降る時」(江口のり子)、名監督小津安二郎をモデルにした鈴木聡作、行定勲演出「先生の背中〜ある映画監督の幻影的回想録〜」(中井貴一)、三谷文楽「人形ざらい」、ニール・サイモンの自伝的作品の完結編を小山ゆうなが演出した「ブロードウェイ・バウンド」(佐藤勝利)、冷戦下のベルリンを舞台にしたゲオルグ・ビューヒナー作、小川絵梨子上演台本・演出「ヴォイツェック」(森田剛)、蓬莱竜太作「シャイニングな女たち」など多彩な舞台が続いた。

休館中のシアターコクーンは新宿のMILANO-ZAに会場を移して公演を重ねた。蓬莱作・演出「おどる夫婦」、戦後の大阪を舞台にした鄭義信作・演出「泣くロミオと怒るジュリエット2025」(桐山照史)、大竹しのぶがリア王に挑んだフィリップ・グリーン演出「リア王」は性差を超えた現代的解釈のリア像が強烈なインパクトを残した。

創立80年記念公演を3年間行ってきた俳優座は最終年度に入った。25年は田中千禾夫作、中村圭吾演出「教育」で幕を開け、瀬戸山美咲作・演出「PERFECT」は障害を持った胎児を産むか否かの選択をめぐる物語。モリス・グライツァン作、菅田華絵演出「ボーイ・オーバー・ボード」はW杯サッカー出場を夢見る兄妹の戦火のアフガニスタンから豪州への脱出行を描いた。桑原裕子作・演出「霧ぬけて」は児童養護施設を舞台にした群像劇で、長田作、眞鍋演出「存在証明」を上演した。

文学座は、田村孝裕作、五戸真理枝演出「もうひとりのわたしへ」は40歳で人生の岐路に立つ女性が主人公。ブレヒト作、西本由香演出「肝っ玉おっ母とその子供たち」は寺田路恵のおっ母に子供たちへの愛がにじみ出た。劇団の代表作である有吉佐和子作、鶴山仁演出「華岡青洲の妻」を吉野実紗の加恵、小野洋子の於継でしっかり継承した。アトリエ公演では山崎元晴作、西本由香演出「リセット」は息子の失踪をめぐる

家族の再生の物語、香港の作家莊梅岩作、香港出身のインディー・チャン演出「野良豚 Wild Boar」は香港を舞台に報道の自由が制限される中で抗うベテラン記者の姿を描いた。

劇団民藝は、デイヴィッド・ペリー作、丹野郁弓演出「八月の鯨」は死を前にした老姉妹の最後の日々を描き、吉永仁郎作、丹野演出「煮えきらない幽霊たち」は江戸時代の蘭学者の苦闘を描いた。嶽本あゆみ作・演出「聴衆0の講演会」は戦中・戦後を生きた美学者中井正一の物語。シライケイタ作・演出「祈りの大地」は、関東大震災直後に起きた朝鮮人虐殺を現代にリンクしながら描いた。稽古場公演では、「記憶の危うさについて」と題したアサー・ミラーの一幕劇2作「だって何も思い出せない」「クララ」を小笠原響演出で連続上演。日色ともゑが「八月の鯨」「だって何もー」の演技で紀伊国屋演劇賞の個人賞を受賞。

青年座は、売れない作家とその妻の夫婦を軸にしたホームドラマの展開の根本宗子作・演出「Lovely wife」で創立70周年記念公演を締めくくり、ソ連の反体制作家ブルガーコフと独裁者スターリンの奇妙な共同作業を描いたジョン・ホッジ作、伊藤大演出「コラボレーターズ」、戦争に翻弄されながらも誠実に生きる家族に温かい目を注ぐ岩瀬颯子作、須藤黄英演出「柿紅葉のころ」、戦後にレビューにかける女性たちが主人公の早船聡作、金澤菜乃英演出の音楽劇「レビュー」を上演した。

青年劇場は、創立60周年記念公演を縄文時代に遊びが禁止になった村を舞台にした佐藤茂紀作、関根信一演出「ホモ・ルーデンス」で締めくくり、九州の炭鉱で過酷な日々を過ごした朝鮮人を主人公にしたシライケイタ脚本・演出「三たびの海峡」、カンヌ映画祭の大賞受賞作をもとにしたデイヴ・ジョーンズ脚本、大谷賢治郎訳・演出「I, Daniel Blake—わたしは、ダニエル・ブレイク」は、複雑で官僚的な福祉制度に自身の尊厳をかけて抗議した男の物語。

文化座はマキノノゾミ作、鶴山仁演出「にんげんたち～労働運動社始末記」で、大正時代に自由を求めて弾圧と戦った人々の群像劇。畑澤聖悟の書下ろしで西川信廣演出「蛍の光、窓のイージス」は、高校卒業式の答辞で、迎撃ミサイルシステム「イージス」の配備計画を批判する文

言をめぐり、教師や生徒たちの思いが錯綜する。

劇団昂は、中島淳彦作、北村総一郎演出「フツの生活・長崎編」で原爆投下直前の長崎の病院を舞台に戦時下に病と闘いながら生きる人々の姿を描き、サム・シェパード作、桐山知也演出「埋められた子供」は噛み合わない会話から家族の不和と不義が浮き彫りとなる。

演劇集団円は、劇団創立者の芥川比呂志が泉鏡花作「夜叉が池」上演を通し、演劇に向き合う姿を描いた内藤裕子作・演出「風のやむとき」、大恐慌下のカリフォルニアを舞台に季節労働者の夢と挫折を描くスタインベックの名作「二十日鼠と人間たち」を松本哲也の演出で上演した。

東演は、戦場に行った夫、恋人を待つ女性たちを描いたジョン・マレル作、原田一樹演出「パレードを待ちながら」、血を売ること家族を支えた男を主人公にした余華の原作、松本祐子上演台本・演出「血を売った男」を再演した。

劇団棧敷童子は、サジキドウジ作、東憲司演出「蟬追い」で年老いた父をめぐり、衝突しながらも掛け替えない時間を重ねる家族を描き、「一九一四大非常」は戦前に1000人を超える犠牲者を出した炭鉱事故で日常が一変する人々の悲劇。

劇団扉座は、横内謙介作・演出「北斎ばあさん」で葛飾北斎の没後、残された娘の老姉妹が父の面影をたどる旅を描き、つかこうへい作、横内演出「つか版・忠臣蔵2025」は、忠臣蔵の物語をつか流に大胆に読み直した作品。2作品の成果で、紀伊国屋演劇賞の団体賞を受賞した。

劇団JACROWは、中村ノブアキ作・演出で議員を支える女たちによるもう一つの政争劇「おどる葉牡丹」を初演し、家具販売店のお家騒動をモチーフにした「骨と肉」を再演。英国の二大政党のドタバタ政争劇を描いたジェームズ・グレアム作「THIS HOUSE」を中村の演出で上演した。

劇団四季は、同名映画をベースにした「ロミオとジュリエット」の誕生秘話ともいえるリー・ホール作、青木豪演出「恋におちたシェークスピア」を再演。歌はなくとも、俳優たちの演技力の高さを実証した。

ホリプロは、ドミニカ・フェロー作、稲葉賀恵演出「リンス・リピート」(寺島しのぶ)は母から娘に受け継がれる愛と痛みの物語。人気漫画をもとに長塚圭史脚本、アブシャロム・ポラック演出「チ。一地球の運動について」(窪田正

孝)は、世界を敵に回しても信念を貫く過酷な戦いを描いた。2024年に初演した藤原竜也主演、源孝志作、蓬萊竜太演出「中村仲蔵〜歌舞伎王国下剋上異聞」を中国・上海で上演した。

シスカンパニーは、大御所俳優と若手俳優の関係が時間の経過とともに変化する過程を描いたデヴィッド・マメット作、水田伸生演出の二人芝居「ライフ・イン・ザ・シアター」(堤真一、中村倫也)のほか、三谷幸喜作「昭和から騒ぎ」、横山拓也作「やなぎにツバメは」を上演した。

井上ひさし作品を上演するこまつ座は、「フロイス」をはじめ、原爆投下後の父娘を描く鶴山仁演出「父と暮せば」、戦前のレコード店を営む家族の物語である栗山民也演出「きらめく星座」、石川啄木の半生を描いた鶴山仁演出「泣き虫なまいき石川啄木」を上演。こまつ座代表の井上麻矢が井上作品を継承した功績で紀伊国屋演劇賞の個人賞を受賞した。

ワタナベエンターテインメントは、オペラの伝説的な歌手マリア・カラスがジュリアード音楽院で行った公開授業をもとにしたテレンス・マクナリー作、森新太郎演出、望海風斗の一人芝居「マスタークラス」、古川作「Too Young」を上演した。

東京グローブ座では、アーサー・ミラーの初期作品「すべての幸運を手にした男」をリンゼイ・ボスナー演出で上演。幸運を手にする一方で、身を滅ぼしていく男の物語。

名取事務所は、ピンク地底人3号作「燃える花嫁」のほか、内藤裕子作・演出「淵に沈む」は精神科医療をめぐる患者と医療従事者、家族の葛藤と苦しみを描き、甲斐義隆作、生田みゆき演出「砂漠のノーマ・ジーン」はオーストラリアで消滅危機のある言語をめぐる、言語学者とそれを話す生き残り女性が繰り広げる物語。エーシーオー沖繩と共同制作し、沖繩のサトウキビ農家の戦後の歩みを5世代にわたって描いた内藤裕子作・演出「カタブイ」三部作の最終編「カタブイ、2025」は、反戦地主の孫娘と自衛隊員の男性との愛を軸に描かれた。

加藤健一事務所、ジョン・マランズ作、藤井ごう演出の音楽劇「詩人の恋」はユダヤ人教授とピアニストの音楽を通した心の交流を描き、吉永仁郎作、加藤健一演出「滝沢家の内乱」は「里見八犬伝」を生んだ滝沢馬琴と息子の嫁との物

語。アーネスト・トンプソン作、西沢栄治演出「黄昏の湖」は死を意識し始めた高齢者夫婦のひと夏の別荘生活を描き、ブライアン・クラーク作、堤泰之演出「請願」は、核兵器使用をめぐる意見は対立しながらも互いを思いやる老夫婦の愛の形を描いた。

トム・プロジェクトは戦後80年を意識した公演が相次いだ。古川作、日澤演出「おぼあとラッパのサンマ裁判」、フィリピンに抑留された戦犯をめぐる「モンテルパ」、東憲司作・演出「鬼灯町鬼灯通り三丁目」は復員した男と迎える家族の物語、ふたくちつよし作・演出「五十億の中でただ一人」は軍隊体験を自らの原点とした作家城山三郎の半生を描いた。

シーエイティプロデュースは、メジャーリーグを舞台にした人間模様を描くリチャード・グリーンバーグ作、藤田俊太郎演出「Take Me Out」、手塚治虫の原作漫画をもとにした福田響志脚本、ウォーリー木下演出「W3 ワンダースリー」、シェクスピア作、森新太郎演出「十二夜」、阪神大震災体験をもとにウォーリー木下の作・演出「1995117546」を上演。

温泉ドラゴンは、原田ゆう作、シライケイタ演出「痕、婚、」で関東大震災直後の朝鮮人虐殺に迫った。

女優7人で結成されたユニット「ON7」は、ベス・フリント作、寺十吾演出「マライア・マーティンの物語」を上演。200年前に英国の田舎町で起こった女性殺害事件をめぐる物語。

1960年代に黒テントを主宰し、アンガラ演劇ブームを担った劇作家で演出家の佐藤信が、2023年まで務めた座・高円寺の芸術監督時代の職員に対する不適切発言がパワハラと認定され、12月に演出予定だった竹下景子主演の朗読劇「ジョルジュ」の演出を自ら降板した。

1960年代を代表する舞台の一つ「真田風雲録」などで知られる劇作家で演出家の福田善之さん、舞台照明の第一人者で、劇団四季の創立メンバーだった吉井澄雄さんが亡くなった。

はやし・なおゆき

2020年に退社するまで日刊スポーツで主に演劇・演芸を担当。文化庁芸術祭、芸術選奨、鶴屋南北戯曲賞などの選考委員を務め、現在は日本芸術文化振興会基金部PO。

[ミュージカル]

2025年のミュージカル界 —オリジナル大作も目立つ

横溝幸子

東宝が菊田一夫の決断で日本で初めてブロードウェイ・ミュージカル「マイ・フェア・レディ」を東京宝塚劇場で初演したのが1964年9月。それから61年後の現在、海外作品、オリジナル作品とも大作から小品まで入り乱れ、年間の上演本数は数えきれぬほどミュージカルはラッシュ状態が続いている。原作も映画、小説、テレビドラマ、アニメ、ゲーム、漫画と多岐にわたる。

帝国劇場閉館と東宝ミュージカル

「屋根の上のヴァイオリン弾き」「レ・ミゼラブル」「ミスサイゴン」「エリザベート」など大型ミュージカルの拠点劇場という重要な役割を果たしてきた帝国劇場が、「レ・ミゼラブル」(2月7日まで)を最後に舞台公演の幕を閉じた。初代帝劇は1911年(明治44年)に日本初の西洋式劇場として誕生。64年に閉館後、66年(昭和41年)に開場した2代目帝劇は、87年初演の「レ・ミゼラブル」でエポニーヌ役の島田歌穂を一躍スターダムに押し上げたように多くのミュージカル俳優を輩出した。「エリザベート」の皇太子ルドルフ役で初舞台を踏んだ井上芳雄の現在の活躍ぶりが、それを証明している。2代目帝劇での上演作品全372本のうち53作品がミュージカルで、フィナーレを飾るコンサート「THE BEST NEW HISTORY COMING」(2月14日～28日)では、帝劇出演者が勢揃いし、ミュージカルナンバー64曲を披露、別れを惜しんだ。3代目帝国劇場は2030年度竣工予定のため、3月以降、東宝ミュージカルは他劇場を借りての公演となった。

主要作品をあげると、森繁久弥と西田敏行からテヴィエを継承した市村正親主演「屋根の上のヴァイオリン弾き」(3月)、岡宮来夢、奥田いろはら若手中心の「1789～バスティーユの恋人たち」(4月)、井上芳雄、浦井健治の「二都物語」(5月)は明治座で上演。高畑充希の「ウエイトレス」(4月)、森崎ウィンの「SPY×FAMILY」(10

月)は日生劇場、中川晃教、加藤和樹の「フランケンシュタイン」(4月)、山口祐一郎と新参加の城田優Wキャストによる「ダンス・オブ・ヴァンパイア」(5月)は東京建物BrilliaHALL、望海風斗・明日海りおの新キャストによる「エリザベート」(10月)は東急シアターオーブ、岡宮来夢・東島京・加藤梨里香・宮本佳林らの「四月は君の嘘」(8月)は人見記念講堂で再演された。シアタークリエの「ジャージーボーイズ」(8・9月)は、16年の初演から中川晃教が演じてきたフランキー・ヴァリ役に小林唯・大音智海、花村想太が加わるなど新人の台頭が目立つ。「ダディ・ロング・レッグズ」(12月)は2012年に井上芳雄、坂本真綾で初演以来7演目。22年の6演目から参加した上白石萌音と坂本のWキャストでのジルージャ役と再演物で少しずつキャストを変えて上演。新人の出演チャンスがふえている。

初演作品「ケイン&アベル」(1～2月 シアターオーブ)は松下洸平のケイン、松下優也のアベルと両松下が競演。シアタークリエの「ヒーロー」(2月)は「ジョジョ」で抜きされた有澤樟太郎が主演。「バグダッド・カフェ」(11月)は花總まりと森公美子が共演するなど配役の妙がうかがえる。

オリジナル作品も良質のものが揃った。「エノケン」(又吉直樹作 和田俊輔作曲 シライケイタ演出)は、喜劇王と言われ、人を笑わせながらも一人息子の死、脱そで足を切断した榎本健一の半生を市村正親が孤独感や悲哀を滲み出し好演した。

「梨泰院クラス」(6月 BrilliaHALL)は、輸入物の韓国ミュージカルではなく、チョ・グアンソン原作の韓国漫画を坂口理子が脚本を手がけたオリジナル作品である。文学座所属のsaraが続く「once」(9月 日生劇場)でも好演するなど、新人が大役に挑んだ。大作は小野不由美のファンタジー小説シリーズの第1作をミュージカル化した「十二国記一月の影 影の海」(元吉

庸泰脚本・歌詞 深津恵梨香音楽 山田和也演出)。高校生の中嶋陽子(加藤梨里香)がケイキ(相葉裕樹)に連れ去られた世界ではボロボロのセーラー服姿のヨーコとなり、元宝塚歌劇男役トップスター柚香光に代わる。柚香は大立廻りなど力強く、2人1役での配役が効果を上げた(12月 日生劇場)

「ラ・マンチャの男」「屋根の上のヴァイオリン弾き」など名作ミュージカルで主演を引き立てた上條恒彦が7月22日、老衰で85歳で亡くなった。

梅田芸術劇場 ホリプロの二大勢力

大阪に梅田芸術劇場のメインホールとドラマシティの2劇場を運営し、舞台制作も手がける梅田芸術劇場が、5月、JR東京駅前の八重洲二丁目中地区の再開発ビル内に1300席の新劇場を29年に開場すると発表した。さらにロンドンに現地法人を設立、梅芸プロデュース作品のロンドン公演を本格化させる。それは「SIX」の舞台で実証させている。ヘンリー八世は38年間の在位中、離婚と処刑をくり返し、6度結婚、「歴史上最もスキャンダラスな暴君」と言われた。「SIX」はその6人の妻たちが現代に蘇えり、ガールズバンドを結成。だれがバンドリーダーにふさわしいかを歌い踊って競い合う。「SIX」の来日公演(1月8日～26日 EXシアター六本木)のち、梅芸はソニー、田村芽実、和希そらら日本人キャストの舞台を上演した(1月31日～2月21日 EXシアター六本木 2月29日～3月2日 名古屋・御園座 3月7日～16日 梅田芸術劇場ドラマシティ)。これが好評で11月に一週間、日本人キャスト版の上演がロンドンのヴォードヴィル劇場で行われた。

コロナのためコンサート方式で3日間しか上演できなかった「イリュージョニスト」(ピーター・ドゥン脚本 マイケル・ブルース作詞・作曲 トム・サザーランド演出)がフルバージョンで初演された。映画「幻影師アイゼンハイム」のミュージカル化。イリュージョニストのアイゼンハイム(海宝直人)と伯爵令嬢ソフィ(愛希れいか)の恋、ソフィはオーストリア皇太子(成河)と婚約していた。芝居、歌、ダンスにイリュージョンが融合したサスペンスミュージカルが面白かった(3月11日～29日 日生劇場

4月8日-20日 梅田芸術劇場)

オリジナル作品では「昭和元祿落語心中」(雲田はる原作 小池修一郎脚本・演出 小澤時史作曲)がミュージカルになった。ドラマで助六を演じた山崎育三郎が熱望したもの。芸者みよ吉(明日海りお)を巡り、七代目八雲(中村梅雀)に弟子入りした初太郎のちの助六(山崎育三郎)と菊比古のちの八雲(古川雄大)の友情や対立が巧みにまとめられていた(2月28日～3月22日 シアターオーブ)

「マタ・ハリ」で柚希礼音・愛希れいかが共演したように宝塚歌劇団出身者の活躍が目立つ。短期公演では、雪組トップスター杜けあきの退団公演で絶賛された「忠臣蔵」が湖説劇形式で33年ぶりに蘇った。万博のために制作された未来への「One Step!」は、剣幸、安寿ミラら8人の元宝塚トップスターを集めたショーで東京でも上演された。湖月わたると柚希礼音の「マイ・フレンド・ジキル」など、宝塚OGを適材適所で出演させている。さらにモーリー・イエストン生誕80周年記念コンサート「Life A Joy! Life Goes On!!」(7月19日・20日 国際フォーラムホールA 7月26、27日 梅田芸術劇場メインホール)は、「グランドホテル」「ファントム」「タイタニック」「ナイン」「DEATH TAKES A HOLIDAY」と20年間に手がけた5作品をコンサート形式で見せるなど、充実した舞台が多かった。

ホリプロは韓国ミュージカル「ワイルド・グレイ」「ミセン」を初演したほか、3演目の「ラブ・ネバー・ダイ」(1月17日～12月24日 日生劇場)では、石丸幹二、市村正親、橋本さとしのファントム、平原綾香 笹本玲奈 真彩希帆のクリスティーヌとトリプルキャストを組み、4演目の「DEATH NOTE」(11月24日～12月14日 Brillia HALL)では、浦井健治の死神リユーク、三浦宏規の名探偵Lに対して夜神月は渡邊蒼、加藤清史郎がWキャストを組んだ。再演の「ジェイミー」(7月9日～27日 BrilliaHALL)もドラッグクィーンを夢見る高校生のジェイミーが三浦宏規、高橋颯のWキャストになるなど、少しずつ出演者が若返っていく。夏休み恒例の「ピーターパン」は45年目。ピーターパンの山崎玲奈は11代目、フック船長とダーリング氏に初登場した石井一孝は初演時の金田龍之介から

数えて25代目というのも上演歴の長さがわかる。長谷川寧の演出は3年目。構成舞台のためロマンが薄れる。

オリジナル作品の「ある男」(平野啓一郎原作 瀬戸山美咲脚本・演出 ジェイソン・ハウランド作曲)が意欲作だ。弁護士城戸章吾(浦井健治)は谷口里枝(ソニン)の依頼で、死んだ夫の谷口大祐(小池徹平)が何者だったのかと依頼を受け、Xの過去を探るうちに自身も影響されていく。ミュージカルならではのスリルと面白さがあった(8月4日～27日 Brillia HALL)

精力的な劇団四季

ロングラン公演に力を入れている劇団四季は、ディズニーミュージカル「美女と野獣」(舞浜アンフィシアター)が11月24日、日本初演30周年を迎えた。1995年の初演時、「東京・大阪同時ロングラン」の上演方式をとり、以後国内10都市で上演。総公演回数は6600回以上、総入場者数は657万人にのぼる。「ライオンキング」(有明四季劇場)は27周年、「アラジン」(電通四季劇場【海】)は10周年、「アナと雪の女王」(四季劇場【春】)は5年目に突入と精力的な公演を続けている。

海外新作ミュージカル「バック・トゥ・ザ・フューチャー」が4月6日、四季劇場【秋】で開幕した。1985年公開の同名映画シリーズ第一作をもとにミュージカル化(ボブ・ゲイル台本 アラン・シルヴェストリ グラン・バラード作詞・作曲 ジョン・ランド演出 クリス・ベイリー振付)され、2021年ロンドン・ウエストエンドで開幕、22年にはローレンス・オリヴィエ賞最優秀新作ミュージカル賞を受賞。23年8月から25年1月までブロードウェイで上演された。ロックスターにあこがれる高校生マーティ(立崇なおと)は、ブラウン博士(野中万寿夫)が実験中のデロリアンに乗ると1955年にタイムスリップしてしまう。最新技術を駆使し、映像、照明、音響を一体化したタイムマシン・デロリアンの疾走感が劇場全体を包み込んだ。27年3月31日まで公演が続く。

児童招待事業「ニッセイ名作シリーズ2025」は「ジャック・オー・ランド〜ユリーと魔物の笛」を上演(6、7月 日生劇場)したほか「こころの劇場」では「ふたりのロッテ」「王子と少年」カ

モメに飛ぶことを教えた猫」の3作品を約140都市で400回公演し、45万人の児童が観劇した。東京・大阪・京都・名古屋・福岡・広島・仙台のほか「こころの劇場」の全国公演を含めて上演回数は2954回、観客動員数は319万人に達する。四季創立メンバーで照明家の吉井澄雄氏が7月2日、老衰のため92歳で亡くなった。

宝塚歌劇団が株式会社で新たなる出発

創立111年の歴史を誇る宝塚歌劇団は、宙組女性の死(2023年9月)をきっかけに上級生のパワハラや 過重労働が表面化。宝塚歌劇団を運営してきた阪急電鉄は4月、ガバナンス(組織統治)強化を目的に株式会社宝塚歌劇団として法人化し、7月に事業を移行、理事長の村上浩爾氏が代表取締役社長に就任し、新たなるスタートをきった。これまでの入団5年目までは雇用契約、6年目以降はフリーランスという業務委託契約が、専科を除く6年目以上の劇団員とも新たに雇用契約を締結した。自己研さんを目的としたものを除き、参加が必要な自主稽古も一定の管理のもとで労働時間として扱うなど大きく改善された。

宝塚音楽学校も応募資格から「容姿端麗」の言葉を削除したが、4月入学の113期生の競争率は11.75倍だった。「ベルばら」ブーム当時は48倍の狭き門が話題になったが、現代の少子化時代を考えるとやはり狭き門は変わらない。

東京宝塚劇場中心に舞台をまとめると、宙組トップスター芹香斗亜が「宝塚110年の恋のうた」(大野拓史作・演出)、「Razzle Dazzle」(田淵大輔作・演出)で4月27日退団した。「令和のトップ・オブ・トップ」と称された星組の礼真琴は、劇団☆新感線と初コラボした「阿修羅城の瞳」(中島かずき原作 いのうえひでのり演出 小柳奈穂子潤色・上演台本・演出)で8月10日、宝塚を卒業した。鬼殺しの異名を持つ出門役で、立廻りも含めての骨太の演技は称賛に値する。退団前の日本武道館でのコンサート(1月18日～21日)も真矢みき、柚希礼音について3人目と、人気の高さがわかる。退団後4か月ぶり開催のコンサート(12月10日 国際フォーラムホールA)は、梅田芸術劇場制作で男性ダンスグループと踊り、歌って女優への道を歩み始めた。

花組の永久輝せあ・星空美咲新トップコン

ビのお披露目公演「エンジェリックライ」(谷貴矢作・演出)は、24年12月7日から正月をまたぐ公演で、1月19日の千秋楽に専科の風七瑠海(2003年初舞台、89期)が卒業した。

続く月組(1月25日～3月9日)も鳳月杏・天紫珠李新トップコンビお披露目で、西部劇タッチの「ゴールデン・リパティ」(大野拓史作・演出)と鳳月をフェニックスにたとえた「PHOENIX RISING」(野口幸作作・演出)で大人の雰囲気漂わせた。

新生雪組(5月3日～6月22日)は、朝美絢・夢白あやトップコンビのお披露目公演「ROBIN THE HERO」(齋藤吉正脚本・演出)で、朝美は颯爽としたロビン・フッドぶり。

芹香斗亜退団後・宙組育ちの桜木みなとが「ZORRO THE MUSICAL」(6月14日～7月3日 シアターオーブ)で主演後、本公演「PRINCE OF LEGEND」(11月22日～26年1月4日)で桜木みなと・春乃さくらトップコンビのお披露目をした。

懐かしい演目は月組の「GUYS AND DOLLS」(10月4日～11月16日)。1984年の初演は月組の大地真央・黒木瞳だった。鳳月杏のスカイに風間柚乃のネイサンが救世軍のサラ(天紫珠李)をハバナに連れ出せば1000ドルを賭けると提案したことから起る恋物語。背広姿のギャングラーの群舞が見事。花組の「DEAN」(12月3日～11日 日本青年館)も極美慎のディーンが格好良かった。花組はドイツミュージカル「Goethe!」(11月16日～24日 国際フォーラムホールC)に挑戦した。

2025年の退団者は宙組トップの芹香斗亜(93期)、星組トップの礼真琴(95期)、専科の風七瑠海(89期)のベテランから108期生の若手まで25人。例年(40人前後)より少ないのは、劇団改革が進んでいることも要因の一つだろう。演出家の谷正純氏が4月5日、72歳で亡くなった。

プロダクション制作の海外ミュージカル

さまざまなプロダクションがミュージカルを制作し上演する中で、テレビ局やエイペック、シー・エー・ティが多く作品に関与している。

ミュージカルとは言えないが、ワタナベエンターテインメント制作「マスタークラス」(テレ

ンス・マクナリー作 森新太郎演出)で・第一線を退いたマリア・カラスがクラシック専攻の学生たちに自分の体験を伝えながら適格で時には辛つな言葉を浴びせる。クラシックの発声法とイタリア語をマスターした望海風斗のマリア・カラスが王巻だった(3月14日～30日 世田谷パブリックシアター)

アミューズ制作「キンキーブーツ」は4演目。メインキャストが一一新され、靴工場の跡取り息子チャーリーが東啓介と有澤樟太郎、ドラッグクィーンのローラは松下優也・甲斐翔真。「ありのままの自分を受け入れることの大切さ」のテーマが伝わった。韓国ミュージカル「マリー・キュリー」(10月25日～11月9日 銀河劇場)は再演。マリーは星風まどか・昆夏美、夫ピエールは葛山信吾と松下優也のWキャスト。

作品中心に話題作をあげるとファンタジー映画のミュージカル化「チキチキバンバン」(1月17日～26日 BrilliaHALL)日本初演の「ホリデイ・イン」(4月1日～11日 シアターオーブ)は坂本昌行のジム、増田貴久のテッド、夢咲ねねのライラ、柚希礼音のリンダの4人の恋とショーが交互に繰り広げられ古き良き時代のミュージカルが味わえた。7年ぶり再演の「サムシング・ロッシン!」(12月19日～1月2日 国際フォーラムホールC)は、売れない劇作家ニック(中川晃教)と弟のナイジェル(大東立樹)がシェイクスピア(加藤和樹)の作品からヒントを得ようとする話。福田雄一演出は遊び心に溢れていた。坂本昌行・海宝直人の2人ミュージカル「MURDER for TOW」、8年ぶり5度目の「FROG & TOAD」は越岡裕貴のかえる・松崎祐介のがまと新キャスト。松竹は「ビートルジュース」を再演、日本テレビの「アニー」は初演から40年続く。

多彩なオリジナル作品

「ある男」「昭和元禄落語心中」「十二国記」の大作以外にもオリジナル作品は多い。手塚治虫作品の「ジャングル大帝」(1月18日～31日 有楽町よみうりホール)はリーディング音楽劇。「BLACK JACK」(鈴木聡脚本 笠松泰洋音楽 栗山民也演出)は、戦時中の細菌研究をからませ、病名不明で倒れた新人女優(大空ゆうひ)の脳内神経から菌を取り出す坂本昌行のブラッ

ク・ジャックに気迫がこもっていた(6月28日～7月13日 IMMシアター)

イツフォーリーズが「ルドルフとイッパイアッテナ」(1月25・26日 俳優座劇場)「ナミヤ雑貨店の奇跡」(3月19日～23日 スペースゼロ)、音楽座が「リトルプリンス」(6月6日～15日 草月ホール 11月14日～16日 IMMシアター)、ミュージカル座は「三ツ星アラカルト」を皮切りに「イソップランド」「ひめゆり」「平和な星」「禪」など小公演ながら着実な歩みを続けている。

マリートの玉野和紀脚本・構成・演出・振付「Love Love de SHOW」(6月5日～12日 I'M A SHOW)でも活躍する東山義久主催の「DIAMOND☆DOGS」は創立22年目を迎え、7人構成にこだわらず一つのカンパニーとして5人の若手を加え、11人による「CONNECT」(3月26日～30日 博品館劇場)を上演、男性ダンサーの熱気がこもる舞台になった。

伊原剛と川平慈英による漫才ミュージカル「なにわシーザーS」(7月17日～27日 エコー劇場)など、さまざまな作品の中でアレックス・シアラーの小説を世界で初めて日本がミュージカル化した「チョコレート・アンダーグラウンド」(高橋亜子脚本・歌詞 オレノグラフィ音楽石丸さち子演出)の注目度が高かった。政権を握った健全健康党がチョコレートを禁止。スマッジャー(北川拓実)とハントリー(東島京)が菓子屋のバビおばさん(土居裕子)と組みチョコレートの密造密売をする。古本屋のブレイズ(岡田浩暉)が立ち上がりテレビを通して「命と自由とチョコレート」を歌う。自由のない国々をチョコレートに託した狙いが伝わった(6月5日～15日 大手町よみうりホール)。俳優座劇場プロデュースで土居裕子が演じてきた「わが町」(ソントン・ワイルダー作 上田亨音楽西川信廣演出)は、4月の俳優座劇場閉館で、今後どこで上演されるのだろうか。

4演目の「手紙」(東野圭吾原作 高橋知伽江脚本 深沢圭子作曲・作詞 藤田俊太郎演出)もいい作品だ。強盗殺人罪で服役中の兄(spi)のために大学でも就職先でも差別を受ける弟(村井良太)の苦悩が“2人だけの兄弟”、“最後の手紙”からひしひしと伝わった。

翼和希がトップの座についたOSKの「夏のおどり」(8月22日～26日 新橋演舞場)は第1部「翔

(花柳寿楽構成・演出・振付)で日本美を見せ、第2部「THE Legendaly !」(中村一徳作・演出)でのタキシードの総踊りなど勢いを盛り返してきた。

来日公演も賑やか

英国からの「SIX」(1月8日～26日 EXシアター六本木)の来日公演が話題になった。ヘンリー8世の6人の妻が現代に蘇えり、歌い踊る。そのパワフルな舞台に圧倒された。

東急シアターオーブでは「ヘドウィグ・アンド・アングリーインチ」の生みの親、ジョン・キャメロン・ミッチェルによるスペシャルショー「ミッドナイト・レディオヒストリー・オブ・ヘドウィグ」(7月19日～21日)世界的ミュージカルスターのラミン・カリムルーが、ハドリー・フレイザーと組んだ「ペテン師と詐欺師コンサート・バージョン」(8月1日～13日)と短期公演も多い。注目度が高かった作品がアダム・クーパーが演出家ザックを演じた「コーラスライン」(9月8日～22日 BrilliaHALL)である。マイケル・ベネット原案・演出・振付では、ザックは客席後方から舞台に注文をつけるが、ニコライ・フォスターの新演出は、ザックのアダム・クーパーは終始舞台上でオーディションを見守り、自分も踊る。

モンゴルから来日した「モンゴルハーン」(10月10日～20日 国際フォーラムホールC)はモンゴルで180回以上ロングランしたヒット作。王妃と側妃に生まれた男子が、首相の悪計で赤ん坊の時にひそかに交換され、成長後王子は悪業を続けて殺される。50名を超える出演者の迫力あるダンス、モンゴル伝統楽器の生演奏など異国情緒がたっぷり味わえた。

恒例の来日公演となった「ブロードウェイ・クリスマス・ワンダーランド・2025」(12月13～25日 シアターオーブ)で一年が締めくくられた。

よこみぞ・ゆきこ

演劇評論家。日本演劇協会理事。都民劇場評議員。歌舞伎サークル企画委員。時事通信社文化部編集委員を経て文化庁芸術祭審査委員、芸術文化振興会演劇専門委員、日本大学芸術学部非常勤講師を歴任。第51回新劇製作者協会賞受賞。著書に「夢を語る役者たち」ほか。

[地方演劇]

2025年の地方演劇概況

森 洋三

《平和祈念の戦後80年企画》

戦後80年。兵役経験を持つ人たちは数少なくなり、沖縄を含めて空襲や戦災の体験者も同様だ。こうした戦争の記憶を風化させない、平和の尊さを今一度確認しようと各地の劇団や演劇団体、地方公共団体などが、原爆や空襲、特攻隊員などそれぞれの様々なテーマで舞台公演に取り組んだ。そうした多彩な取り組みの中で群を抜いて目立ったのが井上ひさしの戯曲「父と暮せば」だ。広島原爆で死んだ父親の幽霊と、生き残った娘との対話による心の交流を描いた名作で知られている。1994年に東京・紀伊国屋ホールで初演、井上ひさしを座付作者に創設されたこまつ座では上演600回を超すという。本家本元のこまつ座も7月は茨城県(つくば市)、8月に山口県(岩国市)で、11月にも沖縄・宮古島で朗読公演を行っている。

「父と暮せば」と原爆

地方演劇人による「父と暮せば」上演は「戦後80年企画」「非戦・平和祈念」「平和発信事業」などのタイトルが付され、アマチュア団体から地方公共団体主催、出演者も中学生などに受け継がれて全国に及んでいる。3月に前橋市総合福祉会館で読み語り芝居(岩淵健二演出)として上演したボランティア団体ヨロコデ(群馬・前橋市)はもう60回以上の上演を重ね、また6~7月にかけて島根県下や広島市で上演(伊三野友章演出)した劇団十三夜(島根・飯南町)は夫婦2人で劇団を組み精力的に続ける。8月には八女福島文平座(福岡・八女市)が甘栄館show劇場(福岡市)や八女伝統芸芸館(八女市)でも上演(中村文平演出)。広島市では演劇ユニット体温(広島市)がアステールプラザ平和発信事業としてJMSアステールプラザ視聴覚スタジオでリーディング公演(中井敏哉演出)。青森市では地元紙の東奥日報社主催で戦後80年平和祈念特別公演として佐々木梅治(劇団民芸)の一人語りで上演。佐々木の「父と暮せば」は200ステ

ジを越すという。静岡市の「静岡・平和をねがう文化のつどい」に劇団静芸(静岡市)が特別招待公演(中川正臣演出)、福岡県の或る企画(福岡・小竹町)は小竹町や北九州市で朗読劇(藤島可利演出)で。さらに9月、愛媛県で曾我部洋士プロデュース企画(愛媛・今治市)として今治ホホ座(曾我部洋士演出)、10月は愛知県で演劇プロデュース集団drama theatre(豊橋市)が穂の国とよはし芸術劇場(小菅かおり演出)で、廿日市市芸術文化振興事業団(広島・廿日市市)主催による戦後80年非核平和事業公演(青山勝演出)。11、12月には劇団いわき小劇場(福島・いわき市)がGSユアさいいわき小劇場(田村学演出)で、大分県ではGifting Peace制作委員会(大分市)が大分市平和市民公園能楽堂で音楽劇(平野綾子演出)としてそれぞれ上演している。

「父と暮せば」以外にも原爆が主題になって上演された公演は少なくない。7、8月に広島市を拠点に活動していた移動演劇隊・桜隊の園井恵子をヒロインに描いた作品に園井組2025(盛岡市)の構成劇「園井恵子~すずらんから沙羅双樹まで」(似内仁総合演出)。またいわてアートサポートセンター(岩手・盛岡市)が戦後80年企画の朗読劇「園井恵子と櫻隊」(坂田裕一脚本・演出)を上演。ちなみに園井恵子は盛岡市に育ち、宝塚歌劇団を経て阪東妻三郎主演の大ヒット映画「無法松の一生」にヒロイン吉岡夫人を演じて一躍スターになった。桜隊は築地小劇場に参加していた丸山定夫らが設立した新劇劇団で広島原爆に遭遇、座員5人が即死、被ばくした丸山、園井ら4人は原爆症で間もなく死亡した。園井が主人公の舞台は12月、東温市移住定住促進協議会(愛媛・東温市)が東温アートヴィレッジセンター・シアターNESTで上演された鈴木智香子ひとり芝居「夢の階~女優園井恵子32年の生涯」(忠の仁作・演出)、アステールプラザ平和発信事業としてNPO法人子どもコミュニティネット広島(広島市)がJMSアステールプラザ多目的スタジオでそれぞれ上演し

た。このほかにも「ヒロシマの孫たち2025」(瀬戸山美咲脚本、宮地綾演出)。「平和を願う朗読劇・豊岡2025上演実行委員会」(兵庫・豊岡市)による原爆の被害を描いた朗読劇「祈り〜1945」(川口宏美構成・演出)は2008年から続く企画。長崎、広島で被ばくした12台のピアノのそれぞれ持ち主の家族の姿を劇団いとしまハローピースアクト(福岡・糸島市)が伊都文化会館で上演した平和劇「とうちゃんのピアノ〜或る子どもたちの話」(伊藤迪佳脚本・演出)は8月に長崎、広島公演も行われた。ほかにも8月、音楽劇「平和の鐘」実行委員会(福岡市)主催による音楽劇「平和の鐘〜ともに未来へ」(谷貴子脚本・演出)は長崎へ修学旅行に訪れた小学6年生が昔の防空壕に入ってタイムスリップ、80年前の長崎に出現して原爆に見舞われるという内容で小・中学生が演じた。一方、ONE VOW プロデュース公演(広島)が広島県民文化センターホールで「夕凧の街 桜の国」(このの史代原作、森岡利行脚本・演出)を。被ばくして亡くなった姉を追憶する旅に出た父親を追跡した娘の物語だ。「広島・長崎被爆80年福岡平和ミュージカル2025実行委員会」(福岡市)はハワイの音楽団体オハナ・アーツを招聘、12歳で亡くなった少女をミュージカル化した「PEACE ON YOUR WINGS〜平和は翼に乗って」佐々木禎子の物語」(ジェニファー・タイラ&ローリー・ルビン脚本、キャリー・チャン演出)を上演。11月には「バウムクーヘンとヒロシマ」広島公演実行委員会(広島市)が劇団イツフォーリーズ(東京)を招聘した「被爆80周年記念事業」ミュージカル「バウムクーヘンとヒロシマ」(柴山ひろみ原作、大西弘記脚本、磯村純演出)も行われた。

様々な沖縄戦、宮本亞門演出「対馬丸ものがたり」も

1945年3月末〜6月末の沖縄戦では県民(一般住民)の犠牲者約9万4千人。日本兵死者約6万6千人と大変な犠牲を生んだ。現在も基地問題を抱える沖縄にとって忘れてはならない記録、記憶として多くの演劇公演が行われた。6月、劇団TEAM SPOT JUMBLE(沖縄・那覇市)が戦後80年企画として白梅学徒(沖縄県立第二高女)をテーマにした「星見草」(安和学治脚本、島

袋寛之演出)を、同じ女生徒の悲劇は8月、劇団上野市民劇場(三重・伊賀市)が朗読劇「広島第二県女二年西組〜原爆で死んだ級友たち」(関千枝子作、福北辨演出)としてそれぞれ上演している。

そんな中で話題と関心を集めた企画が演出家・宮本亞門が全面的に支援した「生きているから〜対馬丸ものがたり」(宮本亞門・今科子脚本、宮本亞門演出)。8月16、17日に那覇文化芸術劇場(沖縄・那覇市)で戦後80年を考える対馬丸実行委員会の主催で上演された。沖縄に長く在住、沖縄と東京を活動拠点にしていた宮本が、鹿児島県恵石島沖で米軍潜水艦に撃沈され沖縄の784人もの子供が亡くなった学童疎開船・対馬丸事件を描く。当時、政府は嚴重なかん口令をしき十分な調査も行われなかったため正式な被害者数は一部不明という。数々の悲劇を生んだガマ(自然洞窟)を取り上げた公演も。

「沖縄戦ガマの中の出来事」(末吉孝脚本、高橋巖演出)は元教員たちの劇団「だいこんの花」(大分・中津市)が創作した作品で6月にコープ大分(大分市)の「戦後80年平和の集い」で劇団による朗読劇、7月には福岡・中間市の中学生18人がなかまハーモニーホールで上演。8月は中津市の平和のための戦争展で、また平和のための戦争展INおおい(大分市)でそれぞれ劇団公演。米軍に追われガマに逃げ込んだ日本兵が米軍に見つかるからと泣き止まない赤ちゃんを殺した実話を取り上げている。ほかに6月、「沖縄戦と平和劇」実行委員会(沖縄・那覇市)が沖縄県立博物館・美術館おきみゅーで「沖縄戦と平和劇」(永田健作脚本・演出)を、8月23、24日には沖縄市民小劇場あしびなーで「グスーヨー! 32軍壕ヘメンソーレ」(藤木志いさ脚本、鷹野克己演出)。軍司令部のあった首里城の軍司令壕の中で何が起こったのかを追求した作品。エーシーオー沖縄(沖縄・那覇市)が戦後80年企画第一弾として1月の「真の花や」(謝名元慶福作、小笠原響演出)をはじめ次々に上演。同作は戦時下で集団の狂気に翻弄されたうちな一芝居一座を描く。11月にもAKNプロジェクトが那覇市、国際芸術祭あいち2025との共催で那覇文化芸術劇場なはーと、愛知県芸術劇場を会場に喜劇「人類館」(知念正真作、知念あかね・新垣七奈演出)を。勸業博覧会(1903年、開

催地・大阪)会場近くの見世物小屋で琉球人たちが展示された事件、加えて沖縄戦や米軍統治など沖縄の歴史を描いた作品。北中城村の村立中央公民館ではハワイ移民の子に生まれ、戦後の沖縄で日系人移民の権利獲得に奔走した功労者比嘉太郎を描いた村民劇「**比嘉太郎物語〜ガジュマルの下で**」(下嶋哲郎原作、仲松昌次脚本、花城清長演出)が上演された。

空襲、特攻兵、抑留の悲劇

1944年6月にB-29爆撃機による初めての空襲が八幡製鉄所を目標に行われた。以来、地方の小都市を含めて全国が目標になり原爆被害の広島約26万人、長崎7万5千人、東京約11万5千人など死者だけで約56万人(※最少の24万人〜最大100万人説もあり、確定的な死者数は不明)と推定されている。三重・桑名市を拠点にする劇団すがおは死者657人、全市民の7割が罹災した桑名空襲をテーマにもう30年以上、連作を重ねてきた。今回は7月、桑名市パブリックセンターで「**命の事情3〜記憶をツナグ**」(篠原史紀作、長谷川浩巳・塚原美鈴演出)を上演。8月、鳥取県演劇連盟(鳥取市)主催、演劇集団あり主管で「**昭和二十年、夏、大山口列車空襲**」(渋谷泰一脚本・演出)。終戦間近にして米軍機に襲撃され多数の死傷者が出た満員列車の悲劇が描かれ、米子市文化ホール公演も行った。「筑紫地区8・6平和のつどい実行委員会」(福岡・筑紫野市)は福岡大空襲の惨劇を描く子供たちの平和劇「**火の雨が降った日**」(筑紫子ども会議脚本・演出)。墜落したB-29爆撃機の兵士処刑、生体解剖なども描かれ、今公演が39回目。名古屋でも劇団俳優館(名古屋市)がアマノ芸術創造センター名古屋で名古屋空襲を描く「**あとかたの街〜名古屋大空襲**」(おざわゆき原作、はせひろいち脚本、ほりみか演出)を上演している。

7月、「山形平和劇場実行委員会」(山形市)が沖縄戦に派兵され、生存者1割の悲劇を朗読劇「**捨石にされた兵士たち〜山形歩兵第32連隊の最期**」(斎藤範雄作、平野礼子脚色・演出)で、8月、岩手県では劇団Zの風(奥州市)が生還した元特攻隊員を取り巻く家族の苦悩を描く「**しいちゃんの夏**」(上田次郎作、高橋瑛子演出)、鹿児島県では400人以上の特攻隊員死者を出した知覧飛行場のある知覧文化会館で劇団いぶき(南

九州市)は特攻隊員と婚約者の愛と苦悩を描いた「**見上げる空の彼方に〜六澤利夫大尉と智恵子さんの物語**」(朝隈克博脚本、朝隈克博・仮屋園修太演出)を。山口県も「周南市戦後80年事業」として人間魚雷回転の悲惨な歴史をつづった若林哲行プロデュース公演「**あゝ大津島蒼き海**」(キッコ、若林哲行、太田勝脚本、太田勝演出)を上演している。残留邦人、シベリア抑留の悲劇も。11月に名古屋で菊本健郎脚本「**望郷**」を上演する会(名古屋市)が満蒙開拓団に看護婦として派遣された女性が残留邦人として悲惨な運命をたどる「**望郷〜凍れる土の国から届いた便り**」(菊本健郎脚本、岡田一彦演出)を。女性の悲劇は8月、札幌市で玉音放送後に集団自決した真岡(樺太・ロシア・サハリン州)郵便局9人の女性交換手たちを描く「**九人の乙女〜氷雪の門**」(金子俊男原作、中間真永脚本・演出)を愛宕劇団(札幌市)がジョブキタ北八劇場で上演。12月、四国でArt and Performance to next-gen(香川・善通寺市)が劇団オムツかぶれと共催、シベリア抑留の過酷な体験を顔として口を閉ざしていた男性が晩年70歳からその記憶を30点の油絵にして残した実話を四国学院大学・仙石桂子教授の書き下ろしで「**沈黙を聴く〜記憶の調べ**」(仙石桂子作・演出)が四国学院大学ノトスタジオで上演された。

大阪・松竹座、アイホール閉館

大阪・道頓堀の松竹座が2026年6月をもって閉鎖される。老朽化がその理由だが、存続を願う市民の存続署名活動も行われている。[関西の演劇]に詳しく報告されるだろうから短信にとどめるが、江戸時代から道頓堀五座が競い合った“なにわのブロードウェイ”で歌舞伎興行が途絶えるのは本当に寂しい限りだ。一方、共同通信ニュースによると福岡市の博多座が大規模な修繕のため29年6月から1年半ほど休館、また名古屋市では御園座再建中に歌舞伎公演が行われていた日本特殊陶業市民会館(名古屋市民会館、大ホール2291席)も27年度末に閉館、35年に新しい劇場(大ホール2200席)に生まれ変わる。明るいニュースは2021年から休館中の福岡・飯塚市(人口約12万3千人)所有の国登録有形文化財・嘉穂劇場(1484席)の復活にようやく目途がついた。同劇場は1921年(大正

11年)に中座として開場、1931年(昭和6年)から嘉穂劇場として再建され、マス席、回り舞台、二つの花道など江戸時代の歌舞伎様式を伝える。大衆演劇の聖地、松竹歌舞伎公演も行われた貴重な劇場で個人オーナー一家からNPO法人の所有へ、そして飯塚市に移管された。改修には36億円が見込まれ開業から100年になる2031年オープンを目指すという。また愛媛県内子町(人口約1万5千人)にある国重要文化財の芝居小屋・内子座の保存修理工事が2月に始まった。2028年9月末まで4年間の休業。1916年(大正5年)に大正天皇即位記念に地元有志によって建てられ、近年は坂東玉三郎の舞踊公演や中村勘九郎・七之助の歌舞伎公演などで賑わっていた。所有者の内子町は保存修理プロジェクト第一弾としてふるさと納税方式のガバメントクラウドファンディングも行って改修費用捻出に取り組んでいる。

演劇界から去就が注目されていた関西屈指の小劇場、兵庫県伊丹市(人口約19万5千人)のAI・HALL(アイホール、伊丹市立演劇ホール)が3月に閉館が公示された。閉鎖の方針が明らかになった22年春以降、様々な劇団から存続の要望・署名活動が巻き起こり、日本劇作家協会の渡辺えり会長や平田オリザ芸術文化観光専門職大学学長(劇団青年団主宰)らが藤原保幸市長に直談判して訴えてきたのだが、伊丹市は25年度末の閉館を決めた。

ホール・劇場のリニューアル事情

ホール、劇場のリニューアルオープン、改修休館がずいぶん目立った。福岡市民会館の後継施設、福岡市民ホール(2016席)が3月28日にオープン、長崎県諫早文化会館(1041席)が4月に。100年ぶりの改修工事に入っていた京都・宮川町歌舞練場(483席)が11月にこけら落とし公演を行った。現在、改修休館中の施設には福島市の福島県文化センター(1758席、384席、開場予定2026年7月)、山口・宇部市文化会館(501席、同26年4月)、山口・周南市文化会館(1800席、同28年10月)、静岡・富士宮市民文化会館(1224席、400席、同26年3月)、静岡市民文化会館(1968席、1170席、同28年1月)、岡山シンフォニーホール(2001席、200席、100席、同27年5月)、栃木・佐野市文化会館(1216席、304席、同

27年4月)、宮城県民会館(1670席)とみやぎNPOプラザを集約する新複合施設「宮城県民会館(仮称)」(2150席、580席、同28年度)、佐野市文化会館(1216席、304席、同27年4月)、富山市のオーバード大ホール(2196席、同27年秋)。

ややジャンルは異なるが、2024年2月に30年の歴史に幕を下ろした名古屋・伏見の国内有数のクラシック専門ホール三井住友海上「しらかわホール」(700席)が多数の署名が実って26年4月に再オープン、存続されることになった。

新しく2026年に工事入りする予定が長崎・佐世保市の文化拠点アルカスSASEBO(2000席、1年7カ月の休館)、滋賀県立芸術劇場「びわ湖ホール」(大ホール1849席、1年5カ月の休館)、和歌山・田辺市の紀南文化会館(1224席、1年5カ月の休館)、このほか高松市の香川県民ホール「レクザムホール」(2001席)が27年1月から1年6カ月の休館(小ホールは6カ月のみ)。また国内屈指のコンサートホールで知られる札幌コンサートホールKitara(札幌市)では札幌市が28年9月から大規模改修工事に入り30年6月くらいまでの休館を発表。同ホール休館による代替施設のないことにクラシックファンから不安の声が上がっているようである。

こうした建て替えラッシュの中、改修費用捻出に各公共団体は苦慮している。工事費用の高騰だけでなく建設会社の建設従事者不足といった事情も加わっている。静岡市民文化会館の場合は舞台照明や音響設備の更新を最小限にして工事費161億円を80億円に圧縮。佐野市文化会館は当初予定の建て替えをやめて改修に転換した。富山・砺波市文化会館(1207席)では改修(7.2億円)か建て替え(54.7億円)かで悩んでいる。徳島文化芸術ホール(1500席)のケースは設計事業者再公募に加えて、当初計画の大ホール1800席を1500席に縮小したが、場合によっては小ホールなしも検討中という。

【訃報】1月14日、関西制作のNHK朝のテレビ小説「まんぷく」や時代劇ドラマ「水戸黄門」出演、出身の関西芸術座(大阪市)の舞台演出など幅広い活動を続けていた俳優・西園寺章雄が死去、77歳。6月11日、北海道の演劇界をけん引してきた札幌在住の北海道演劇財団理事長で俳優・劇作家・演出家、演劇プロデューサーの齋藤歩が死去。60歳。尿路上皮がんで余命半年

の宣告を受けてからも2年以上俳優としての活動をつづけた。6月23日、上野市民劇場代表・創立メンバー(元上野市文化協会会長)の**杉森正美**が死去、91歳。10月30日、伝統芸能「猿回し」復活の立て役者だった周防猿回しの会の調教師・**村崎義則**が死去、60歳。(敬称略)

仲代達矢の死去に際して名誉館長を務めていた能登演劇堂(石川・七尾市石川町)に設けられた献花台に多数の市民が花を捧げた。仲代や無名塾の地域に密着してきた活動を象徴しているが、同様にこうした地域と共生を目指す地方劇団の活動の一端を――。

【1月】19日・牧之原市**大河ドラマ活用推進協議会**が相良総合センターいーらで「田沼意次物語」(松尾朋虎脚本・演出)を、25,26日・**じゆう劇場**(鳥取市)が鳥の劇場で「THE COMEDY OF ERRORS 間違いの喜劇」(シェークスピア作、中島諒人、齊藤頼陽・構成演出)を上演。25,26日・**劇団サザカン**(青森・弘前市)がSPACE DENEGAで「愛しかねえだろう ファイナル」(清水司脚本・演出)を、30～2月2日・**劇団吉劇屋**(大阪・枚方市)が高槻芸術文化劇場で「地底人CEREMONY」(大熊隆太郎脚本・演出)を上演。31～2月3日・**ニットキャップシアター**(京都市)がAI HALLで25周年記念公演「さらば、象」(ごまのはえ脚本、小原延之演出)を上演。

【2月】13～16日・**まつもと市民芸術館(松本市)プロデュース公演**が同館小ホールで「殿様と私」(マキノノゾミ作・演出)を、15,16日、22,23日・**宜野座村文化のまちづくり実行委**(沖縄)が宜野座村がらまんホールで「お通夜」(ダニエル・ロベス作・演出)を、22,23日・**劇団歴史新大陸**(岡山市)が岡山芸術創造劇場ハレノワ中劇場で「ラストサムライ～瀧善三郎のBUSHIDO」(天沢彰脚本、後藤勝徳演出)を、27～3月2日・**劇団怪獣無法地帯**(札幌市)がターミナルプラザことにPATOSUで「ご一族様」(棚田満脚本・演出)を、28～3月2日・**劇団そとぼこまち**(大阪市)が箕面市立文化芸術劇場でエンタメ時代劇「幕末」(坂田大地脚本・演出)を。

【3月】8、9日・**劇団白つばき**(三重・多気町)がBANKYO文化会館で「決断の刻～義士福井文右衛門」(岸武男脚本、竹森伸一演出)を、13～16日・**劇団匿名劇壇**(大阪府)がインディペンデントシアター2ndで「いいから早く助けて」

(福谷圭祐作・演出)を、14日・**劇団玄喜座**(愛媛・伊予市)がIYO夢みらい館で時代劇アクションコメディ「二刀流放浪記～いよ島決闘!」(岩гент作・演出)を、21～23日・**劇団新劇場**(札幌市)が大人の事情協議会とのコラボ公演としてターミナルプラザことにPATOSUで「こんにちは、母さん」(永井愛作、栗原聡美演出)を、27日・**劇団たね蒔く人たち**(山口・光市)が光市民ホールで20周年記念公演「お金持ちと靴屋さん」(ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ原作、たつの素子脚本、高橋聖子・梅津敏英演出)を、29,30日・**演劇集団和歌山**(和歌山市)が劇団創立55周年記念、きたまち和歌浦小劇場こけら落とし公演「錨を上げたらふり返るな」(楠本幸男作、山入桂吾演出)を、29,30日・**ミュージカルカンパニーWOZ**(富山・魚津市)が新川文化ホールで「ウオズの魔法使いⅢ」(中易百恵脚本・演出)を。

【4月】26、27日・**劇団夜明け**(岐阜・中津川市)が地歌舞伎小屋常盤座で「片づけたい女たち」(永井愛作、鈴木弘文演出)を、26,27日・**劇団大阪シニア演劇大学2024**(大阪市)が谷町劇場で「わが町」(ソートン・ワイルダー作、吉田美彦演出)を上演。

【5月】23～25日(6月12～15日)・**劇団名古屋**(名古屋市)がアトリエ★758で「子どもと大人と食堂と。」(大西弘記作、谷川伸彦演出)を、30～6月8日・**劇団未来**(大阪市)が「来訪者～『警視の来訪』より」(プリーストリー作、しまよしみち演出)を、30～6月1日・**札幌座**(札幌市)がシアターZOOで「葉桜」(岸田國土作、斎藤歩脚色・演出)を。

【6月】6～8日・**劇団芝居屋かいとうらんま**(岐阜・大垣市)がアトリエ・ゼロで「翼生えぬ午後 屋上にて」(後藤卓也脚本、蒙古斑演出)を、28、29日・**劇団きらら**(熊本市)が喫茶ギャラリー・キムラで40周年記念リーディング企画「40祭」(池田美樹脚本・演出)を、28、29日・**劇団G-フォレスト**(兵庫・尼崎市)が新開地アートひろばで「青い空の真下で2025Final～阪神・淡路大震災30年祈念公演」(丸尾拓作・演出)を。

【7月】4～6日・**劇団大阪**(大阪市)が谷町劇場で「落選の神様」(高橋恵作・演出)を、5日・**劇団名芸**(名古屋市)が天白文化小劇場で「大どろ

ぼうホッツェン・プロッツ」(プロイスラー原作、栗木英章脚本、亀山薫演出)を。6日、12、13日・ミュージカルカンパニーOZmate(兵庫・丹波篠山市)がOZシアターで「銀河鉄道に乗って」(辻井奈緒子作・演出)を、19、20日・劇団石(熊本市)が健軍文化ホールで55周年記念公演「法王庁の避妊法」(篠田達明原作、鈴木裕美・飯島早苗脚本、邑木みほ演出)を。27日・劇団仙台小劇場(仙台市)が山形市中央公民館ホールで「東天を仰ぐ〜平和を求める安達峰一郎」(石垣政裕作・演出)をそれぞれ上演。

【8月】9～16日・札幌座(札幌市)がジョブキタ北八劇場で「劇後鼎談」(斎藤歩脚本・演出)を、22～24日・片隅企画(愛媛・普通寺市)が東温アートヴィレッジセンターシアターNESTで「命を弄ぶふたりたち」(岸田國土原作、大瀬戸正宗翻案・演出)を。

【9月】19～21日・劇団ドラマシアターども(北海道・江別市)がどもⅣで「子守唄」(安念智康作、ども演出)を、19～21日・ジョブキタ北八劇場(札幌市)主催による「天国への会談」(納谷真大脚本・演出)を。19～21日・劇団タルオルム(東大阪市)が一心寺シアター倶楽で旗揚げ20周年特別企画「おとうとが消えた日」(金民樹脚本・演出)を。20、21日・演劇及び文化創造集団C.A.W(北海道苫小牧市)が苫小牧演劇堂で「キープ オン フライイング! 2025」(鈴木英之脚本・演出)を上演。

【10月】11、12日・幻想劇場(松本市)が上土劇場で「100億光年の記憶〜まじめや古道具店奇譚」(廣田謙一脚本・演出)を、17～19日、24、25日・劇団はぐるま(岐阜市)が御浪町ホールで「MIDSUMMER CAROL〜ガマ王子VSザリガニ魔人」(後藤ひろひと作、松尾泰介演出)を、18、19日(11月8、9日)・劇団からっかぜ(浜松市)が劇団アトリエで「あした天気になあれ」(ふたくちつよし作、布施佑一郎演出)を上演。24～11月3日・劇団ハンニャーズ(新潟市)が月潟稽古場で創立30周年記念公演「ウルトラリップス」(中嶋かねまさ脚本・演出)を、25日・劇団120〇EN(福島市)が古民家旧馬場家で「音連れ梅にしのぶ滝」(清野和也脚本、加藤亜美演出)を、26日・劇団きんしゃい(長崎・諫早市)が西諫早公民館で「本明川物語〜家族一昨日・今日・そして明日」(山本博幸原作、きんしゃい

脚色、小川供孝演出)を。

【11月】1、2日・劇団サラダボール(香川・普通寺市)が香川・丸亀市の木鳥神社千歳座で瀬戸内国際芸術祭参加作品として「平家物語〜RE MASTER」(木ノ下裕一補綴、西村和宏演出)を、14～23日・劇団未来(大阪市)が未来ワークスタジオで「五人のアルベルティーン」(M・トランプレイ作、しまよしみち演出)を。15日・劇団弘演(青森・弘前市)が弘前文化センターで「安楽兵舎V.S.O.P.」(ジェームス三木作、作問しのぶ演出)を、21～24日・虚空旅団(大阪市)がAI・HALLで「氷河の果てに」(高橋憲作・演出)を上演。24、25日・黒猫舎(岩手・盛岡市)がいわてアートサポートセンター風のスタジオで15周年記念公演「イーハトーブからやってきた三つのお話」(菅原のみ子構成・演出)を、28、29日・劇団支木(青森市)がアウガ多機能ホールで「終わらない人たち」(田辺典忠作、中野健演出)を、28～30日・関西芸術座(大阪市)がABCホールで「病は気から」(モリエール作、松寺千恵美演出)を。29、30日、12月6、7日・劇団UZ(愛媛・松山市)がアトリエhacoで「あの鳥は鳴とも〜能『隅田川』より」(伊豆野眸作・演出)を、30日・劇団名古屋(名古屋市)がアトリエ☆758で「少年口伝隊1945」(井上ひさし作、谷川伸彦演出)を。

【12月】13、14日・劇団演集(名古屋市)が愛知県芸術劇場小ホールで「紙屋町さくらホテル」(井上ひさし作、土屋たかし演出)を、12～14日・劇団@nDANTE(新潟市)が古町えんとつシアターで「ロンリネスデブリー・エイジド」(石川kenjiro.-作・演出)を。13、14日・シニア演劇倶楽部うつろ座(名古屋市)が人形劇場ひまわりで「いっぽんのキ」(北村想作、小熊ヒデジ演出)を。19、20日・劇団山形(山形市)が山形市中央公民館ホールで創立60周年記念公演「イーハトーボの劇列車」(井上ひさし作、平野礼子演出)を上演。
もり・ようぞう

演劇評論・ライター。1941年大阪市生まれ、早大第一文学部卒。1964年～2006年、中日新聞・東京新聞(放送芸能部長、編集委員)勤務。文化庁芸術祭審査委員、同芸術選奨選考委員、国立劇場歌舞伎公演専門委員等を歴任。日本演劇協会、芸能学会会員。松尾芸能賞選考委員。

[関西の演劇]

2025年「大阪松竹座、2026年5月興業を最後に閉館」衝撃走る 宮辻政夫

松竹は2025年8月28日、大阪松竹座(1033席)での興行は2026年5月公演をもって終了、その後、地下1、2階の店舗も含め、地上8階のビル全体を閉館する、と発表した。これは演劇ファンはじめ上方文化に関心を持っている人達に、大きな衝撃を与えた。大阪松竹座は現在、大歌舞伎が上演される大阪で唯一の劇場である。さらに、大阪松竹座のある道頓堀は、江戸時代から多くの劇場が建ち並んだ町——劇場街であった。すでに承応元年(1652)、道頓堀の3座、つまり中ノ芝居(後の中座)、角ノ芝居(同、角座)、大西ノ芝居(同、浪花座)の名代(興業権者)が幕府によって認められている。ちなみに、ロンドンのウェストエンドに最初の劇場「シアターロイヤル」が開場したのが1663年5月。ニューヨークのブロードウェイの歴史は1883年、旧メトロポリタン歌劇場が建設されたのに始まる。芝居町としての道頓堀の歴史と繁栄は、世界史的に見ても古くかつ大規模であることがわかる。それが戦後まで続いてきたのである。その道頓堀も今は大劇場と言えば大阪松竹座だけという有様。その大阪松竹座まで閉鎖されるとあれば、大阪の演劇文化はどうなるのか、という危機感を多くの関西人が抱いたのも当然だろう。存続を求める署名活動が始まっている。

現在の大阪松竹座は1923(大正12)年5月17日、開場。歌舞伎の木造小屋などが建ち並ぶ道頓堀の西端に、突如として鉄筋コンクリート造り、ネオ・ルネッサンス様式の白亜の劇場が出現したのである。しかも劇場内部は栈敷ではなく椅子席。外観、建築、内装すべてにわたり関西初の洋式劇場だった。正面玄関の大アーチは「道頓堀の凱旋門」と呼ばれ、たちまち大阪の新名所になった。以後、外国映画の封切と松竹楽劇部(1922年4月発足、現OSK日本歌劇団)のレビュー実演の組み合わせを中心として発展。その後、洋画封切館になった。さらに永山武臣・松竹会長(当時)は大阪松竹座を道頓堀再開発の核として位置づけて1997(平成9)年2月26日、

歌舞伎はじめ演劇の劇場として新装開場した。以後、1月、7月の大歌舞伎公演が定着。歌舞伎役者らの船乗り込みは夏の大阪の風物詩としても人気を呼んでいた。

ちなみに今回の発表に関連して「道頓堀五座」として「浪花座、中座、角座、朝日座、弁天座」が挙げられているが、これがいつの時代なのかまで明記されているのをメディアはじめて見たことがない。これは明治20、30年代の「五座」であり、江戸時代からこれらが「道頓堀五座」だったのではないのである。「道頓堀五座」という言葉が出来るのは江戸時代末期で、その頃は「大西ノ芝居(浪花座)、中ノ芝居(中座)、角ノ芝居(角座)、若太夫ノ芝居(阪恵座)、竹田ノ芝居(弁天座)」が挙げられていた。戦後、上記「弁天座」の跡地(道頓堀の東端)に「朝日座」が出来ており、年代表記がないと、混乱を招きかねない。年代表記は必須なのである。「道頓堀五座」は、芝居町・道頓堀の繁栄を象徴する言葉であるが、時代によりその五座が異なることに留意しなければならない。

八代目菊五郎、六代目菊之助襲名披露

〈歌舞伎〉大阪松竹座から。1月3～8日は「坂東玉三郎 初春お年玉公演」。玉三郎が『残月』(地歌、峰崎勾当作曲)を舞い、『長崎十二景』(竹邑類構成、花柳壽輔監修)を見せた。『残月』は地歌の追善の名曲である。『長崎十二景』は竹久夢二の同題の作品に描かれている女性に玉三郎が扮し、女の日常の十二態を描き出した。

1月11日～26日は「片岡仁左衛門・坂東玉三郎 初春特別公演」。二人の代表作である『於染久松色詠販』『神田祭』が上演され、仁左衛門の鬼門の喜兵衛、玉三郎の土手のお六。凄みあり、ユーモアあり。堪能できた。『神田祭』は仁左衛門の齋頭、芸者の玉三郎。二人で醸し出す粋な雰囲気、色気は他に類を見ない。

2月は大阪府・市「大阪国際文化芸術プロジェクト」の立春歌舞伎。昼の部は「十種香」か

ら。扇雀の八重垣姫、壱太郎の濡衣、虎之介の勝頼、鴈治郎の上杉謙信。『封印切』は獅童の忠兵衛、鴈治郎の八右衛門。『幸助餅』は、関取の雷(中車)を蟲貞にして財産を使い果たしたが、雷から冷たくあしらわれて発奮する幸助(鴈治郎)の話。松竹新喜劇の傑作を鴈治郎が歌舞伎に移入した作品。夜の部『義経千本桜』の「道行初音旅」は狐忠信が虎之介、静は壱太郎。「川連法眼館」は獅童の狐忠信。

5月は大阪・関西万博開催記念「薫風歌舞伎特別公演」。第1部は『今昔歌舞伎草紙』(藤間勘十郎構成・振付)の後『脈々奇書異聞 夢窓西遊記』(戸部和久脚本・演出)。下界に降りて太閤になっている孫悟空(橋之助)を連れ戻すように、三蔵法師(愛之助)は猪八戒(福之助)と沙悟浄(歌之助)に命じる。やがて大天狗(笑三郎)との合戦に。橋之助は足の親指を上げるなど荒事を取り入れた演技。第2部『千夜一夜譚 荒神之巻(今井豊茂脚本、藤間勘十郎演出・振付)』。安羅仁(虎之介)がランプをこすると魔神(猿弥)が出現。謀反の罪で安羅仁が捕らえられそうになり、母周愛(扇雀)は自害する——弟を助けるために紗武利矢王(鴈治郎)の前で一夜一話ずつ咲薔薇王妃(笑也)が話してきた、千夜目の物語であった。第3部は『湧昇水鯉滝 鯉つかみ』(水口一夫脚本・演出)。愛之助の代表作の一つで6年ぶり7回目の上演。本水の中、大鯉と大立ち回りを演じる志賀之助など善悪11役を早変わり。宙乗りまで見せる奮闘ぶり。小桜姫の壱太郎が風情ある踊りを見せ好演。釣家老の中車が手堅い。

七月大歌舞伎は八代目尾上菊五郎、六代目尾上菊之助襲名披露。昼の部は『新版歌祭文』「野崎村」から。壱太郎のお光。久松(隼人)との祝言が決まってうれしいお光をよく表現。後半、出家したお光は六代目型のザンバラ髪ではなく、古風に切髪姿。「うれしかったは、たった……半割」と「……」部分の間をたっぷり取って久松への思いを表現した。

『羽根の禿』は六代目菊之助の禿。深く膝を折るなど十分に体を使って踊る。『浮かれ坊主』は八代目菊五郎(以下、八代目と表記)。半裸姿で定九郎、与市兵衛など軽妙に踊り分け、女の振りも巧み。鮮やかな踊りだった。

『髪結新三』は八代目の新三。最初の出は下手

からが一般的だが、八代目は原作通り花道から出る。粋な髪結いの男ぶりを見せた。白子屋の手代忠七(萬太郎)を唆してお熊(米吉)を連れ出す。永代橋の場では悪党の正体を現す。台詞の時代、世話の語り分けが早い。悪の目が利いている。新三内の場。お熊を取り返しに来た弥太五郎源七(錦之助)とのやりとりでは、台詞の緩急強弱が生きて充分聞かせた。錦之助も好演。緊迫感が出て盛り上がった。弥太五郎源七の後、交渉に来る家主、長兵衛(弥十郎)。これは太々しく、新三とのやりとりに面白さ、おかしさが出た。

感動的、仁左衛門の「熊谷陣屋」

『熊谷陣屋』は仁左衛門の熊谷直実。揚幕の音はさせずに花道に登場。七三で数珠を出して拝む。他の熊谷役者はここで袖から数珠を出しても、ちらりと見るだけですぐに袂へ入れてしまう。これは終盤、熊谷が出家することがわかってしまうので、それを避けるためである。しかし仁左衛門の場合、ここで数珠を持って一心に拝む。それは一子小次郎を平敦盛の身代わりに討つためである。出家するという底を割ってしまおうが、ただひたすらに拝む。感動的である。物語の場面は武将としての熊谷の姿を描き出し、敦盛の描写も巧み。「熊谷やらぬ」と出てきて熊谷の大刀を持って構える藤の方(壱太郎)。大刀の重みを表現して周到である。

熊谷が首桶を持って長袴姿で登場。武将の大きさがあがる。義経(錦之助)が颯爽としている。藤の方が首を見たいと望むのを、首実検前の内見は叶わぬ、と拒否し制札の見得になる。制札の頭を下に突く團十郎型だが、三段の上に突くのではなく、首を隠すかのように首桶の前に突く——あくまで内見は叶わぬ、という強い意志の表明——仁左衛門のやり方である。

義経が敦盛の首だと認めた後、首を抱き締めるかのように胸に押し当てるのが感動的だ。首を手ずから相模(孝太郎)に渡すのは芝蕪型にもあるが、團十郎型で演じて首を手ずから相模に渡すのは仁左衛門だけである。首は敦盛の身代わりになったわが子小次郎の首で、それを中に父母子が繋がる感動的な場面を造るのである。相模のクドキは孝太郎がたっぷり見せた。鎧姿の熊谷が登場。鎧の胴から脱いでいき最後に兜

を取って僧形の頭を見せるやり方が一般的だが、これは最後まで兜を被っているので形が悪くなる。わざとらしい、などの意見がある。仁左衛門は真っ先に兜を脱ぎ、僧形の頭を見せる。以前からこの手順である。いいやり方である。文楽も同様である。花道の引つ込みは無常観に打たれつつ、なおも武士であることに煩悶する姿を見せて充分であった。弥陀六は歌六。

八代目菊五郎、六代目菊之助襲名披露口上の後、『土蜘蛛』。八代目の僧智壽実(ちゆうじゆ)は土蜘蛛の精。僧形で出てきて妖気を漂わせる。源頼光(時蔵)を襲うが果たせず去って行く。後半は土蜘蛛の精となって立ち回りを見せた。侍女胡蝶は菊之助。上品に舞った。関西・歌舞伎を愛する会第33回公演。

南座は花形歌舞伎から顔見世まで

南座は恒例の三月花形歌舞伎から。松プログラムは『妹背山婦女庭訓』『三笠山御殿』と『お染の五役』、桜プログラムは『伊勢音頭恋寝刃』『油屋』『奥庭』と『お染の五役』。

『三笠山御殿』から。皇位篡奪を企む蘇我入鹿(猿弥)の屋敷へ、藤原鎌足の使者として鱧七実(はな)は金輪五郎(福之助)がやってくる。橘姫(吉太郎)、続いて求女(虎之介)、それを追ってお三輪(米吉)が来る。豆腐買いは壱太郎。官女達(蝶十郎)が来て、さんざんにお三輪をはじめめる。米吉が辛い運命にある女を好演。さらに橘姫と求女が祝言をあげていると知り、嫉妬に狂う。一気に変貌する様を上々。『お染の五役』は、通常の『お染の七役』のうち大切の道行部分を独立させたもの。久松、お染と幾度か変わり、久松になってから、ゴザを体に巻いたお染(吹き替え)と花道で擦れ違い、一瞬でお染に早変わり。狂乱のお光、土手のお六、鬼門の喜兵衛と、いずれも鮮やかな早変わりであった。『伊勢音頭恋寝刃』は虎之介の貢。成駒家型でなく大筋、松嶋屋型で演じた。万野は壱太郎。意地の悪さが出ていた。お鹿は猿弥。芸達者である。お紺は米吉。喜助は福之助。万次郎は吉太郎。

6月の坂東玉三郎特別公演はほぼ1月の大阪松竹座公演と同じ。8月後半は『刀剣乱舞 東鑑雪魔縁』(松岡亮演出、尾上菊之丞演出振付、尾上松也演出)。三代將軍源実朝が鎌倉の鶴岡八幡宮で暗殺された事件を題材にしている。三

日月宗近(松也)、陸奥守吉行・実朝(歌昇)、同田貫正国・公暁(鷹之資)、髭切(苔玉)、加州清光・実朝御台(左近)、膝丸(吉太郎)ら人気の花形役者が勢揃い。客席は若い女性ファンで満員だった。

10月は市川團十郎特別公演。昼の部は『三升先代萩』(石川耕土補綴)。『伽羅先代萩』に「不破名古屋」の世界を取り入れた、五代目團十郎の先行作を元にした作品。團十郎が七役早変わり奮闘した。

「三浦屋格字先」で不破伴左衛門(團十郎)と名古屋山三(虎之介)との鞘当を見せ、足利頼兼(團十郎)に早変わり。足利家忠臣、渡辺民部の九團次が手堅い。廓外で闇討ちされる頼兼を助ける力士の絹川谷蔵(團十郎)。仁木弾正(團十郎)も出てくる。「足利家御殿」では頼兼の嫡子、鶴千代(奥谷悠玄、川人麻央)を乳母政岡(團十郎)が守っている。栄御前(市蔵)の持ってきた毒入り菓子(政岡の一人千松(澤翔雅、松本宋尚)が食べて苦しむと、八汐(右團次)が千松を刺す。右團次は河内屋の型を取り入れた演じ方。「床下」は團十郎が荒獅子男之助から仁木に変わり、「問津所対決」は仁木、細川勝元と早変わり。続く「花水橋」は不破、仁木と変わる。最後の「刃傷」では仁木の立回り。團十郎大奮闘であった。

夜の部は「歌舞伎の世界」。廣松と虎之介の『二人娘顔』の後、『菅原伝授手習鑑』『車引』。松王丸(九團次)と梅王丸(虎之介)、桜丸(廣松)の三兄弟が争う。藤原時平は市蔵。最後は『荒事絵姿化粧鑑』。舞台で團十郎が『暫』の鎌倉権五郎の鬘や大衣裳を身に付けていくところを見せた。総重量60キロ。

12月の吉例顔見世興行は八代目菊五郎・六代目菊之助襲名披露。満員である。『醍醐の花見』の後『一條大蔵譚』。「檜垣茶屋」で大蔵卿の作り阿呆ぶりを幸四郎が巧みに見せ、「奥殿」では反平家の本心を見せつつ、作り阿呆ぶりも見せた。常盤御前の七之助が気品、意志の強さを表現して好演。鬼次郎の愛之助、女房お京の壱太郎が手堅い。『玉兎』は菊之助がしっかり踊り、足の運びなど上々。『鷺娘』は八代目菊五郎が恋の妄執に狂う鷺の精を表現。ラストは舞台に倒れ込むやり方。

『平家女護島』は仁左衛門の俊寛(Aプロ)。俊

寛が丹波少将成経(隼人)と千鳥(蒼玉)の祝言を見ていて涙ぐむなど、細部にも情が溢れている。丹左衛門の勘九郎が爽やかで好演。妻東屋が平清盛によって首討たれた、と瀬尾太郎(彦三郎)から聞くと、茫然となる。目の色が変わる。瀬尾を斬る決意を固めた時も目が変わり、極めて劇的。瀬尾を斬って自分は島に残り、代わりに千鳥を乗船させる。花道七三の切穴に身を沈めて周りに波布が迫るのも、仁左衛門のやり方。岩の上から船を見送るラストは、優しい目になり、うん、うん、と頷いて、幕。勘九郎の俊寛(Bプロ)は父勘三郎譲りなので細部など仁左衛門とは違うが、充実していた。丹左衛門は巳之助。

『寿曾我対面』は曾我十郎(孝太郎)、五郎(愛之助)兄弟が父の仇、工藤祐経(梅玉)と対面する。愛之助に力感が溢れ、孝太郎は柔らかな和事味がある。梅玉に風格。襲名披露口上の後『弁天娘女男白浪』。八代目菊五郎の弁天小僧。花道の出の風情、台詞からして見事である。「知らざあ言って……」以下の台詞のイキのよさ、面白さ、華やかさは無類である。幸四郎の日本駄右衛門に貫目があり、勘九郎の南郷力丸も充分。『三人形』は奴(巳之助)、若衆(隼人)、傾城(耆太郎)が華やかに見せた。

南座恒例の歌舞伎鑑賞教室は5月、『相生獅子』を千壽と吉太郎が舞った。

愛之助が座頭を勤める第15回永楽館歌舞伎は9月末日から6日間。『寿曾我対面』、口上、『神の鳥』(水口一夫作・演出)。永楽館のある兵庫県豊岡市はコウノトリの生息地。コウノトリを生贄にしようとする赤松満祐(彦三郎)。そこへコウノトリの父母(愛之助、耆太郎)が狂言師に化けて来るが捕まってしまう。それを山中鹿之介(愛之助)が助ける。平成26年、永楽館で初演。

門閥外の役者達の公演では第10回あべの歌舞伎「晴の会」が『夏祭浪花鑑』(仁左衛門監修・指導、山村友五郎演出、亀屋東斎改訂)を八月に上演。団七(松十郎)、徳兵衛・義平次(千次郎)、お辰・おくら婆(千壽)、釣舟三婦(當吉郎)、女房おつぎ・堤藤内(竹之助)という顔ぶれ。熱演であった。

大槻文蔵らの活躍続く

〈能楽〉大阪・大槻能楽堂の自主公演能として1月3日は『翁』(観世淳夫)、狂言『松樫』(茂山千五郎)、能『春日龍神<龍女之舞>』(浅井文義)。淳夫は荘重に翁を舞い、力量を示した。『松樫』は永遠の繁栄を願うめでたい狂言。『春日龍神』は浅井が手堅く舞った。1月4日は『翁<子宝>』(大槻文蔵)から。文蔵の神歌、荘重な舞から国土安穩の祈念が漂ってくる。〈子宝〉は三番叟(野村裕基)の小書。面箱(中村修一)との問答が常とは変わる。裕基は構え、動き、台詞とも型がしっかりしている。狂言『酢薑』は野村万作、萬斎という豪華版。『二人静<立出一声>』は観世鏡之丞、片山九郎右衛門。イキが合い充実した舞であった。

「大槻文蔵と読み解く能の世界～能作者そして作品～」シリーズは好評で、3月は「観世次郎信光」の作品について高桑いづみと対談。その後、狂言『文蔵』(野村萬斎)『船弁慶<重前後之替、早装束、舟唄>』(観世喜正)。対談も能狂言も堪能できた。「能に見る鬼の世界」シリーズでは4月、松岡心平が「鬼のルーツ」と題して講演。狂言『清水』(茂山忠三郎)、能『野守<黒頭、天地之声>』(梅若紀彰)が上演された。松岡心平は5、6月も講演し、豊富な内容だった。

11月の自主公演能は『弱法師』(友枝昭世)。12月は『隅田川』(大槻文蔵)と、人間国宝二人の見応え充分な舞台が続いた。

インバウンド向けのOSAKA NOH FESTA in Uemachiが9月、大槻能楽堂で開催された。『羽衣<和合之舞>』(観世清和)と『船弁慶<前後之替>』(観世三郎太)。シテ方観世流26世宗家、清和が天女の優美な舞を見せ、その継嗣・三郎太が静と勇壮な知盛とを前後で演じ分けた。

復曲試演の会『宮城野』

京都観世会(片山九郎右衛門会長)の第8回復曲試演の会は4月、復曲能『宮城野』(片山伸吾)を上演した(西野春雄監修・校訂・補綴)。陸奥・宮城野を訪れた僧は一人の少年と出会い、宮千代という少年の塚へ案内される。宮千代は「月は露つゆは草葉に宿かりて」と上の句を詠んだが、下の句が調わず嘆いて空しくなってしまうという。僧が「憂き世の旅を宮城野の秋」と下の句を詠むと、少年は喜び、自分こそ宮千

代の霊、と言って消える。後場は宮千代の霊が出現、迷いが晴れたことを喜び、舞を舞って消えていく。美しさと儚さがたゆたう能であった。なお『宮城野』は喜多流の節付本が仙台市に残っており、平成19年5月「第10回仙台青葉能」で友枝昭世が舞った。

九郎右衛門『松風』

京都のシテ方観世流、片山九郎右衛門の第27回後援会能は5月、京都観世会館で開催された。『松風(見留)』(九郎右衛門、観世淳夫)。在原行平の形見の装束と烏帽子を手に九郎右衛門が謡うと、松風の気持ちか通ってくる。沈んだ風情が見事だった。狂言『ぬけから』は萬齋。『恋重荷』は、シテ・鍔之丞。前シテ・山科莊司は自然体の出。重荷が持ち上げられず、橋ガカリまでは気迫ある歩み、橋ガカリから駆け込んだ。後シテは杖を女御(片山峻佑)の背に当てるだけ。従来の象徴的な演じ方で、充分に能の世界を表現した。

シテ方金剛流若宗家、金剛龍謹は第13回「龍門之會」を8月、金剛能楽堂で開き『邯鄲(藁屋十二段)』を舞った。龍謹は謡、語りともしっかりしており、聞き応え充分。狭い藁屋の中での舞から舞台へ出てきての舞まで、確かな足拍子が快い緊迫感を伝えてくる。しかも安定した華やかな舞。〈藁屋十二段〉という重い小書が付くので、従来の舞よりも難度は上がるが、見事な舞であった。九歳の長男、謹一朗は『花月』を、七歳の次男、宣之輔は『邯鄲』の子方(舞童)で舞った。

金剛能楽堂で3月開催された「茂山狂言会春」は、四世千作十三回忌・五世千作七回忌追善。追善曲『樂阿彌』は、千五郎が尺八を吹き死にした樂阿彌の幽霊に扮し、語りを充分に聞かせた。『雁磔』(鳳仁)の後『鎌腹』(逸平)。小舞『蛸』(竜正)『鶴飼』(虎真)があり『武悪』。武悪(茂)、主人(七五三)、太郎冠者(宗彦)が前半の緊迫した展開から後半のくだけたやりとりへと自然に移行して上々だった。茂山千之丞は6月、大江能楽堂で「新作」純、狂言集マリコウジを開催。千之丞作・演出の新作『妻乞冠者』『狸憑き』と古典『栗焼』。あきら、千五郎らが出演。いい会であった。

〈文楽〉国立文楽劇場公演を見ていこう。1月は

前年から続く『仮名手本忠臣蔵』通しの最後、八、九段目が上演された。人形では戸無瀬の和生、本蔵の勘十郎が充実ぶりを見せた。『新版歌祭文』は、おみつを遣った清十郎が好演。『本朝廿四孝』は「道行」から「奥庭狐火」まで。4月は『義経千本桜』通し。「すしや」の前半は呂勢太夫、清治。世話の自在さと時代物の格調とを併せ持った語りで充分に聞かせた。後半は若太夫、清介。清介が相変わらず手強い三味線で、段切りなど圧倒的である。「道行初音旅」は織太夫、藤蔵ら。テンポよく語った。人形では勘十郎が狐忠信役を通して遣った。7～8月は第1部が『西遊記(完結編)』。子供連れて賑わった。第2部は『一谷嫩軍記』『桂川連理柵』、第3部は『伊勢音頭恋寝刃』『小鍛冶』と2演目とも刀にまつわる芝居。刀剣ブームを当て込み、それなりの成果はあったようだ。9～10月はAプロが『恋女房染分手綱』『道中双六』『重の井子別れ』。勘十郎が重の井を遣って好演。永い間通しでは上演されていない。Bプロ『心中天網島』通し。「河庄」前半は千歳太夫、富助。後半は呂勢太夫、清治。呂勢太夫が治兵衛、小春、孫右衛門三人の絡みを巧みに語った。人形は玉男の治兵衛、孫右衛門の和生、小春の勘彌と揃った。Cプロは『曾根崎心中』。

林与一、健在ぶりを披露

〈現代演劇〉「松竹 上方喜劇まつり」として11月、南座で『一姫二太郎三かぼちゃ』『お祭り提灯』を上演。藤山直美の他、林与一、三林京子、中村亀鶴がゲスト出演。とにかく笑わせようとする直実の喜劇役者ぶりが凄まじい。与一は『一姫二太郎』の慈愛溢れる老父ぶり、さらに『お祭り提灯』の提灯屋徳兵衛で見せる、上方の商人の品のよい風、変わらぬ二枚目ぶりが見事である。

松竹新喜劇は1月、南座で新春お年玉公演。『春の夢 嗚呼！恋は勘違い』と『淡路島 温泉町値上がり中』を上演。後者は淡路島のホテルなどが全面協力。同島出身の戸田ルナが熱演。元宝塚歌劇団の有沙瞳、さらに常連の久本雅美がゲスト出演した。9月は大阪松竹座で『愚兄愚弟』『駕籠や捕物帳』を上演。歌手、辰巳ゆうとがゲスト出演。殿様に扮して笑いを巻き起こした。

好企画！『MOTHER』

吹田市文化会館・メイシアター開館40周年記念として『MOTHER——君わらひたまふことなかれ』が9月、同シアターで上演された。マキノノゾミの脚本を南河内万歳一座の内藤裕敬が演出するという好企画、さらに与謝野晶子役にキムラ緑子、その夫鉄幹役に升毅というかつて関西の小劇場演劇を支えた実力派が揃った。

『MOTHER』は1994年、劇団青年座創立40周年記念としてマキノが書き下ろし。紀伊國屋ホールでの初演から高い評価を得、大劇場などでも再演を繰り返してきた。私も何回か観劇してきたが、今回の内藤演出が、男女としての晶子と鉄幹の愛情物語という面を最もよく表現していた。といっても、大胆な演出があったわけではなく、ちょっとした細部——二人の寄り添い方など——が見事な力を獲得していたのである。脚本、演出、俳優の演技がびったり重なった、という感じ。キムラ、升が力量を発揮した。他のキャスティングも、や乃えいじ(PM/飛ぶ教室)、平井久美子(元ピッコロ劇団)、菊地彩香(関西芸術座)と目配りが行き届いていた。

南河内万歳一座は5～6月『予言者・H』(内藤裕敬作・演出)を一心寺シアター倶楽で上演。お化けアパートの住人達を描きつつ、生きていく指針を失った現代社会、現代人の不安な漂流を描き、傑作であった。

2024年度大阪劇団協議会プロデュース公演『アルトゥロ・ウイの興隆』(ベルトルト・プレヒト作、市川明翻訳、鈴木健之亮演出)が2月、メイシアターで上演された。シカゴのギャングの興隆とナチスの台頭とを重ね合わせた作。現代でも訴える力を失っていないかった。2025年度同協議会プロデュース公演『小平太参る！』(山本周五郎原作、森脇京子翻案・脚色、井之上淳演出)は12月、ABCホールで上演。珍しく時代劇である。難波屋八郎兵衛(尾崎磨基)を相手にして町奉行、望月小平太(宇仁菅真)の活躍を描き面白く仕上がっていた。

関西俳優協議会(宇仁菅真会長)の2025年度最優秀新人賞が以下のように決定した。男優は梅谷浩晃(劇団しし座)、女優は石野りく(劇団五期会)。梅谷は『断定はウソをつく 予言の館殺人事件』(竹内介原案、角真世脚色、北川隆一演出)の軽妙とシリアス両様の演技、石野は『歌

姫』(宅間孝行作、井之上淳演出)で、記憶の戻った男性との将来を諦めるが前向きな女性の演技が、それぞれ認められた。またこの『歌姫』では、勝村愛が亡父の好きだった映画を見るため息子と共に土佐清水の映画館を訪れる小泉ひばりなど3役を演じて、その役作り、演技、演技分けなど見事な力量を示した。なお、同協議会の「最優秀新人賞」贈呈事業は50回目を迎えた。

『宝塚歌劇』1～2月『にぎたつの海に月出づ』(平松結有作・演出)、3～4月『儂き星の照らす海の果てに』(中村真央作・演出)など若手の作・演出家達の挑戦的な作品など計5本が上演され、活性化に貢献した。

宮辻政夫(みやつじ・まさお)

演劇評論家。元毎日新聞専門編集委員。著書に『仁左衛門花実抄』『花のひと一孝夫から仁左衛門へ』『無辺光一片山幽雪聞書』(共著)『人形有情——吉田玉男文楽芸談聞き書き』など。

[テレビ・ドラマ]

2025年のテレビドラマ ～多様な価値観をおおらかに包む～ オリジナル・単発ドラマも活況

中町綾子

2025年のテレビドラマは、立場や背景の違いを越えて互いを認め合うおおらかな価値観を描く作品が目をつけた。

高校生活における価値観の衝突と対話を描いた日曜劇場『御上先生』(TBS、1月～3月)、『僕たちはまだその星の校則を知らない』(関西テレビ、4月～6月)。宇宙人や超能力が存在する日常を通してテーマを浮かび上がらせた日曜ドラマ『ホットスポット』(日本テレビ、1月～3月)や『ちょっとだけエスパー』(テレビ朝日、10月～12月)などが、その例である。

さらに、育児環境の異なる家族を描く『対岸の家事～これが、私の生きる道！～』(TBS、7月～9月)や、還暦を迎える主人公の心の微機を心地よい会話で紡ぐ『続・続・最後から二番目の恋』(フジテレビ、7月～9月)といった、多様なライフスタイルやライフステージの局面に寄り添う作品も多く見られた。一方で、日曜劇場『ザ・ロイヤルファミリー』(TBS、10月～12月)は、ひとつの夢を世代を越えて受け継ぎ、追いかける物語を描いた。

日々の暮らしの大切さを描くドラマとしては、NHKドラマ10枠で放送された『しあわせは食べて寝て待て』(4月～5月)や『ひらやすみ』(11月～12月)が挙げられる。おひとりさまの老後を考える土曜ドラマ『ひとりて死にたい』も、広い意味で日常の暮らしをベースに、自身の価値観を問い直す作品である。これらのドラマからは、社会が共有する価値観のゆるやかな変化が伝えられていた。こうした傾向は、静かだが確実な広がりを見せた。

また、海外で亡くなった邦人の人生とその思いに光をあてるドラマ10『エンジェルフライト』(NHK、5月～6月、配信・BS放送は2024年)や、東京・新宿の東新宿署を舞台に在日外国人の犯罪を他者理解の立場から描いた『東京サラダボウル』(NHK、1月～3月)、など 国際的な視野をもった作品にも良作があった。

恋愛ドラマでは、40歳間近の男性と職場のイ

ケメン後輩との恋愛を描いたドラマ24『40までにしたい10のこと』(テレビ東京、7月～9月)や、昭和初期を舞台にしたラブコメディ木曜劇場『波うららかに、めおと日和』(フジテレビ、4月～6月)が注目された。『波うららかに、めおと日和』は配信サービスでの見逃し配信(再生回数)が記録的な回数を達成したことも話題になった。

個人の生き方や価値観の違いを前提に、社会的な役割や仕事、子育て、家族、老い、暮らしといった現実的なテーマを深く掘り下げる作品が多く見られたことは、2025年の大きな特徴である。互いに異なる立場や感情がある状況を丁寧に描く姿勢は、日本のテレビドラマの近年の流れをさらに深化させている。

NHKの大河ドラマ『べらぼう～篤重栄華乃夢斬～』、連続テレビ小説『あんぱん』、ドラマ10枠のドラマやTBSの日曜劇場、火曜ドラマ枠のドラマを中心に、脚本家、制作陣の個性が前面に出た作品が並び、原作ものにおいても大胆な再構築が試みられた。

とりわけ、日常を描く作品群の厚みは、近年でも印象に残るものだった。

〇連続ドラマの注目作

●1月スタートの連続ドラマ

ドラマ10『東京サラダボウル』(NHK)

多国籍都市となりつつある東京の新宿・大久保を舞台に、“外国人犯罪・事件”と人間ドラマを重ねた社会派ドラマ。奈緒が演じる刑事と松田龍平が演じる通訳人の視点を通し、異文化理解の難しさと可能性を描いた。外国人居住者が身近となった東京を再認識させる良作だった。人びとへのまなざしが温かく事件の諸側面を描いて見応えがあった。台湾の俳優、張翰(チャン・ハン)が出演した第3・4回(前後編)が特筆される。事件解決のプロセスを他者を知る行為として描き、身近な出来事に感じさせた。(原作=黒丸『東京サラダボウル—国際捜査

事件簿一』、脚本＝金沢知樹、演出＝津田温子、川井隼人、水元泰嗣、制作統括＝家富未央、磯智明、プロデューサー＝中川聡子、出演＝奈緒、松田龍平、メインテーマ＝Balmng Tiger「Wash Away」、東京ドラマアウォード2025 作品賞 連続ドラマ部門 優秀賞、ギャラクシー賞2月度月間賞)

●日曜ドラマ『ホットスポット』(日本テレビ)

富士山の麓の田舎町に暮らす主人公たち(市川ら)がごく自然に宇宙人(角田)のいる日常を受け入れている。地元系エイリアン・ヒューマン・コメディ。宇宙人も超能力者もただのクセが強い人も日常の中に馴染んでいる。その寛容さがユーモアに溢れていた。大らかなコミュニティで楽しそうに助け合い、寛容力の高い世界線がバカリズム脚本ならではの魅力だった。(脚本＝バカリズム、演出＝水野格、山田信義、松田健斗、チーフプロデューサー＝道坂忠久、プロデューサー＝小田玲奈、小田井雄介、野田健太、出演＝市川実日子、角田晃広、鈴木杏、平岩紙、夏帆、坂井真紀、東京ドラマアウォード2025 作品賞 連続ドラマ部門 優秀賞、Content Asia Awards 2025 アジアで1か国市場向けに製作された連続ドラマ部門 銅賞)

●日曜劇場『御上先生』(TBS)

官僚派遣制度で私立の進学高に赴任した教師(松坂)が生徒たちに主体的に考えることの大切さを伝える。松坂桃李が抑制の効いた演技で生徒たちの魅力をひきだした。対話型学園ドラマのスタイルでありながら、生徒たちがイニシアチブをとり大人の社会の不正に迫る。奥平大兼はじめ多くの生徒役の熟演が際立った。核心を突くセリフに緊張感があった。(脚本＝詩森ろば、演出＝宮崎陽平、嶋田広野、小牧桜、プロデューサー＝飯田和孝、中西真央、主題歌＝ONE OK ROCK「Puppets Can't Control You」出演＝松坂桃李、吉岡里帆、奥平大兼、蒔田彩珠、堀田真由他、東京ドラマアウォード2025 作品賞 連続ドラマ部門 優秀賞、ギャラクシー賞テレビ部門3月度月間賞)

●夜ドラ『パニラな毎日』(NHK)

念願の店をもつが経営が続かず閉店に追い込まれたオーナーパティシエ(蓮佛)と、料理研究家(永作)が開くたった一人のためのお菓子教室を舞台に、お菓子作りを通して生徒の心を癒

す。心の傷を甘いスイーツで癒す再生の物語という点が新鮮だった。ラブストーリーとしても魅力があった。(原作＝賀十つばさ『パニラな毎日』『パニラなバカンス』、脚本＝倉光泰子、演出＝一木正恵、安達もじり、押田友太、影浦安希子、制作統括＝熊野律時、プロデューサー＝二見大輔、出演＝蓮佛美沙子、永作博美、木戸大聖、ギャラクシー賞テレビ部門3月度月間賞)

○4月スタートの連続ドラマ

●『僕たちはまだその星の校則を知らない』(関西テレビ)

スクールロイヤー(磯村)として私立高校に派遣され、校則を通して若者と社会規範の関係を問い直すなど、生徒たちのひとつひとつの思い(テーマ)に真正面から向き合う。思春期に抱く繊細な想いが大人の心の奥にも未解決なまま残っているのかもしれないと思わせてくれた。繊細に爽やかに深く心に届くドラマだった。大森美香のオリジナル脚本に拍手を送りたい。(脚本＝大森美香、音楽＝Benjamin Bedoussac、監督＝山口健人、高橋名月、稲留武、プロデューサー＝岡光寛子、白石裕菜、出演＝磯村勇斗、堀田真由、平岩紙、市川実和子、ギャラクシー賞テレビ部門9月度月間賞)

●ドラマ24『40までにしたい10のこと』(テレビ東京)

40歳間近の男性と職場のイケメン後輩とのBLドラマ。歳の差の表現に普遍性があった。年齢を重ねると臆病になったり億劫になったりする。そんな日常が誰かと過ごすことでキラキラと輝き始める。俳優陣(風間・庄司)の演技、映像表現(演出)、小道具などの美術、衣装などの総力戦で、すずめ(風間)と慶司(庄司)がいる空間への没入感を演出した。(原作＝マミタ、脚本＝齊藤よう、監督＝池田千尋、小菅規照、出演＝風間俊介、庄司浩平)

●木曜劇場『波うららかに、めおと日和』(フジテレビ)

昭和初期に交際ゼロ日婚で結ばれた夫婦の初々しい関係が描かれた。昭和ラブロマン、レトロラブコメディーとでもいうべき新ジャンルの可能性を切り拓いた。相手を思いやり、自分の気持ちにも戸惑う。不器用にひたむきにというレトロな感覚を吉根京子が好演。本田響矢も

まっすぐに清々しい人物像で魅力を放った。(原作＝西香はち、脚本＝泉澤陽子、演出＝平野眞、森脇智延、チーフプロデューサー＝宋ハナ、制作プロデュース＝古郡真也、出演＝芳根京子、本田響矢、和久井映見ほか、東京ドラマアウォード2025 作品賞 連続ドラマ部門 優秀賞)

●ドラマ10『しあわせは食べて寝て待て』(NHK)

病気を抱えて生きる日常を、食と時間の積み重ねとして描写した。静かな肯定感が印象的だった。自分の置かれた状況に抗わずに、その状況を受け入れ、周囲からも受け入れられる。マイナスから始まった主人公の幸せを描いた。(原作＝水風トリ、脚本＝桑原亮子、ねじめ彩木、演出＝中野亮平ほか、制作統括＝小松昌代、出演＝桜井ユキ、宮沢氷魚、加賀まりこ、ギャラクシー賞テレビ部門5月度月間賞)

●土曜ドラマ『地震のあとで』(NHK)

村上春樹の短編集『神の子どもたちはみな踊る』に収録の4作品をドラマ化した。阪神・淡路大震災直後、東日本大震災直前、コロナ禍、そして2025年の東京へと流れる全4話のストーリー。(原作＝村上春樹『UFOが鉦路に降りる』、『アイロンのある風景』、『神の子どもたちはみな踊る』、『かえるくん、東京を救う』、脚本＝大江崇允、演出＝井上剛、音楽＝大友良英、制作統括＝山本晃久、樋口俊一、京田光広、プロデューサー＝訓覇圭、中川聡子、出演＝岡田将生、橋本愛、唐田えりか、ギャラクシー賞テレビ部門4月度月間賞)

○5月スタートの連続ドラマ

●土曜ドラマ『エンジェルフライト』(NHK)

海外で亡くなった邦人の遺体を日本の遺族に届ける国際霊柩送還士の活躍を描く。海外に渡った人が最期をどう生きたか、遺されたものはどうその最期を受け入れるかに向き合う。脚本、映像、演技と圧倒的な力量で心に深く訴えかける密度の高い作品だった。(原作＝佐々涼子『エンジェルフライト 国際霊柩送還士』、脚本＝古沢良太、香坂隆史、監督＝堀切園健太郎、プロデューサー＝後藤高久、出演＝米倉涼子、松本穂香、草刈民代、遠藤憲一、主題歌＝EMI EVANS「THE VOICE」)

○6月スタートの連続ドラマ

●土曜ドラマ『ひとりでしたいたい』(NHK)

アイドルの推し活に勤しみ猫を愛する。一人暮らしを謳歌していた女性(綾瀬)が、憧れだった叔母の孤独死をきっかけに、終活に目覚める。幸せに生きて幸せに死にたい。そんな気持ちをコメディータッチで描いた。(原作＝カレー沢薫、脚本＝大森美香、演出＝石井永二、小林直希、熊坂出、制作統括＝高城朝子、尾崎裕和、出演＝綾瀬はるか、佐野勇斗、國村隼、松坂慶子)

○7月スタートの連続ドラマ

●火曜ドラマ『対岸の家事～これが、私の生きる道！～』(TBS)

家事、育児、仕事をめぐる価値観の違いを、対立ではなく共存として描いた。それぞれに違う育児環境の家族をバランスよく描き、説得力がある。リアリティーがあり考えさせられるセリフも多かった。多部未華子の好演で、違う生き方であっても放っておけない、知らんぷりできないという感覚を伝えたことも大きな収穫だった。(原作＝朱野帰子、脚本＝青塚美穂、大塚祐希、開真理、演出＝竹村謙太郎、坂上卓、林雅貴、プロデューサー＝倉貫健二郎、阿部愛沙美、出演＝多部未華子、江口のりこ、ディーン・フジオカ、一ノ瀬ワタル)

●『続・続・最後から二番目の恋』(フジテレビ)

鎌倉に移住したテレビドラマプロデューサー(小泉)と、市役所職員(中井)の丁々発止の会話が楽しく人気を博したドラマの13年越しの続編。現実との地続き感がたまらない。登場人物たちは生活環境やキャリアという点で決して普通の人ではないが、等身大の気持ちをすくいあげてくれる。60代の二人の主人公。シーズンを重ねた関係性だからこそ紡げる世界観だった。(脚本＝岡田恵和、演出＝植木野礼ほか、プロデュース＝若松央樹ほか、出演＝小泉今日子、中井貴一、坂口憲二、内田有紀、飯島直子、ギャラクシー賞テレビ部門6月度月間賞)

○9月スタートの連続ドラマ

●夜ドラ『いつか、無重力の宙で』(NHK)

高校時代に同じ天文部だった30代女性が再会し、小型人工衛星機を宇宙に飛ばす夢に挑戦

する。2025年はNHKが放送開始から100年の節目にあたり「放送100年 NHK 宇宙・未来プロジェクト」を掲げた。このドラマもプロジェクトの一環として放送された。30代女性の夢と成長を描くオリジナルドラマだ。撮影は関西近郊で行われた。(作=武田雄樹、演出=佐藤玲衣、盆子原誠、押田友太、制作統括=福岡利武、プロデューサー=南野彩子、出演=木竜麻生、森田望智、片山友希、伊藤万理華、奥平大兼、ギャラクシー賞テレビ部門10月度月間賞)

●木曜ドラマ『しあわせな結婚』(テレビ朝日)

愛してしまった女性(松)の家族の秘密を軸に、どうしようもなく愛してしまう、どうしようもなくわかりあえない、起こってしまう、といったことをスリリングに描き出した。深く緊張感のある愛を描き出す大石静脚本ならではのサスペンスだった。(脚本=大石静、監督=黒崎博、星野和成、榎木野礼、製作総指揮=中川慎子、プロデューサー=田中真由子、山形亮介、森田美桜、大古場栄一、出演=阿部サダヲ、松たか子、板垣光光人、岡部たかし、段田安則、玉置玲央、ギャラクシー賞テレビ部門9月度月間賞)

○10月スタートの連続ドラマ

●『ちょっとだけエスパー』(テレビ朝日)

とある企業の任務で集まった、素性も年齢も異なる人たち(大泉、ディーン、高畑、宇野)が、ささやかな超能力でささやかな任務を果たすSFラブロマンス。使命感を得て生きる意味をみつける、運命の交錯など野木亜紀子脚本ならではのメッセージが紡がれた。(脚本=野木亜紀子、監督=村尾嘉昭ほか、プロデューサー=貴島彩理、出演=大泉洋、宮崎あおい、ディーン・フジオカ、高畑淳子、宇野祥平、岡田将生)

●日曜劇場『ザ・ロイヤルファミリー』(TBS)

血縁や使命感から巡り合った人々が、ひとつの夢を受け継ぎ、託し合う姿を、競走馬や牧場、競馬場といった美しい映像のなかですすがしく丁寧に描いた。夢をつなぐ熱さとファミリーとしての結束力を描く。塚原あゆ子、松田礼人はじめ、細部の演出のバランス感覚が気持ちよい。(原作=早見和真、脚本=喜安浩平、演出=塚原あゆ子ほか、プロデューサー=加藤章一、出演=妻夫木聡、目黒蓮、佐藤浩市、主題歌=玉置浩二「ファンファーレ」)

●火曜ドラマ『じゃあ、あんたが作ってみよう』(TBS)

大学時代から6年交際した末にプロポーズしたところ断られた(断った)二人のその後を描く。分かり合うことよりも相手を「知ろうとする姿勢」を描いた点が新鮮だった。女性はこうあるべき、家庭はこうあるべきに縛られてきた二人が、今はもうどうしても交わらない。価値観の狭間で、それでも理解しようと奮闘するまっすぐな感性が気持ちよく演じられた。(原作=谷口菜津子、企画=関川友理、脚本=安藤奎、加藤法子、上野詩織他、演出=伊東祥宏ほか、出演=夏帆、竹内涼真、中条あやみ)

●『もしもこの世が舞台なら、楽屋はどこにあるのだろう』(フジテレビ)

1980年代の渋谷の演劇界を舞台にした大人の青春群像劇。当時の演劇界を知る者にはひとつの固有名詞や人物像にリアリティがあった。昭和時代が舞台となる現代時代劇ともいえる。演劇文化史をとらえた点も貴重だった。(脚本=三谷幸喜、演出=西浦正記ほか、プロデューサー=金城綾香、野田悠介、出演=菅田将暉、二階堂ふみ、神木隆之介)

○11月スタートの連続ドラマ

●ドラマ10『ひらやすみ』(NHK)

ヒロトは(岡山)俳優としての仕事が続かずアルバイト暮らしをし、身寄りのない女性から阿佐ヶ谷の一軒家を譲り受けて、大学進学で上京した姪(森)と二人暮らしを始める。周囲の人からすれば、彼は、そうなりたような、なかなかない、なりたくないという存在だ。岡山天音がそんな複雑な人物像を、森七菜が大学でスタートダッシュをきりそびれた地方出身の学生の屈託をリアルに演じた。(原作=真造圭伍、脚本=米内山陽子、演出=松本佳奈ほか、制作統括=坂部康二、出演=岡山天音、森七菜、吉岡里帆ほか、エンディング曲 =生田ヒロト(岡山天音)、小林なつみ(森七菜)「Keep on rolling」、ギャラクシー賞テレビ部門11月度月間賞)

○年間を通じた話題作

●連続テレビ小説『あんぱん』(NHK)

『あんぱんマン』の作者・やなせたかしをモデルとして、作品のメッセージでもある平和の尊

さ、戦争の残酷さにフォーカスしてエピソード紡いだ。戦後80年にふさわしい朝ドラだった。8月だけでなく、ほぼ全編にわたって平和を希求する思いが伝わる作品。出演者たちの熱演が目をついた。(作=中園ミホ、演出=柳川強ほか、制作統括=倉崎憲、出演=今田美桜、北村匠海、河合優実、原菜乃華、二宮和也ほか、主題歌=RADWIMPS「賜物(たまもの)」)

●大河ドラマ『べらぼう〜篤重栄華乃夢噺〜』(NHK)

江戸時代に出版文化を牽引した葛屋重三郎(横浜)の波乱に満ちた人生を描く。出版文化、社会を生き抜く女性への視点、彼女たちをとりまく庶民(町人)や芸術家たちの描写、政治と暮らしの関係への示唆などもりだくさんで、知的好奇心を刺激する作品だった。俳優陣の好演も目立った。(作=森下佳子、演出=大原拓ほか、チーフプロデューサー=藤並英樹、出演=横浜流星、安田顕、小芝風花、染谷将太、橋本愛、渡辺謙ほか、ギャラクシー賞テレビ部門12月度月間賞)

○注目の単発ドラマ

●新春スペシャルドラマ『スロウトレイン』(TBS、1月2日)

鎌倉に住む渋谷家の三姉弟(松、多部、松坂)は交通事故で両親と祖母を一度に亡くしている。その二十三回忌の法事の帰り道の江ノ電の車からドラマが始まる。三人は、それぞれにしっかりしていてそれぞれに不器用だ。家族としての距離感、自分との距離感を絶妙に描く脚本、演技、演出ともにすばらしい。(脚本=野木亜紀子、演出=土井裕泰、プロデューサー=小牧桜、スーパーバイジングプロデューサー=那須田淳、出演=松たか子、多部未華子、松坂桃李、星野源、東京ドラマアウォード2025 作品賞単発ドラマ部門 グランプリ、ギャラクシー賞テレビ部門1月度月間賞)

●テレビ朝日ドラマスペシャル『新・暴れん坊将軍』(テレビ朝日、1月4日)

1978年から2002年にかけて放送された『暴れん坊将軍』が17年ぶりに復活。八代将軍の徳川吉宗(松平健)の治世となって二十有余年。吉宗は享保の大飢饉から民を救うため対策に迫られる。また、還暦を控えて後継問題にも頭を悩ま

せる。監督=三池崇史と脚本・大森美香がタッグを組んだ作品で、世相や、世継問題、陰謀などを重層的に描いた。(脚本=大森美香、監督=三池崇史、エグゼクティブプロデューサー=内山聖子、塚田英明、ゼネラルプロデューサー=服部宣之、プロデューサー=後藤達哉、土井健生、坂美佐子、出演=松平健、西畑大吾ほか、東京ドラマアウォード2025 作品賞 単発ドラマ部門 グランプリ)

●特集ドラマ『憶えのない殺人』(NHK、2月22日)

住民に親しまれる駐在所警官だった男(小林)が殺人事件の捜査対象となる。しかし、彼にはまったく身に覚えがない。認知症を患った元警官と刑事(尾野)の緊迫感溢れる関係のなかに事件の解決をこえて、自分の人生を支えるものは何か、信念とは何か、記憶とは何かなど、重層的なメッセージを投げかける。大森美香脚本のオリジナルドラマ。(演出=片岡敬司、チーフプロデューサー=後藤高久、磯智明、出演=小林薫、尾野真千子、東京ドラマアウォード2025 作品賞 単発ドラマ部門 グランプリ、ギャラクシー賞テレビ部門2月度月間賞)

●三谷幸喜『おい、太宰』(WOWOW、6月29日)

太宰治をこよなく愛する会社員(田中)が迷い込んだ海辺の洞窟をくぐると、そこは昭和初期の世界だった。彼は、そこで太宰治(松山)と恋人のトミ子(小池)と出会い、タイムスリップを繰り返しながらトミ子を心中から救いたいと奔走する。約100分間一度もカメラが止まらないワンカット撮影で、ノンストップ・タイムスリップコメディと銘打って放送された。(脚本・監督=三谷幸喜、出演=田中圭、小池栄子、松山ケンイチほか、東京ドラマアウォード2025 作品賞 単発ドラマ部門 グランプリ)

●戦後80年ドラマ『八月の声を運ぶ男』(NHK、8月13日)

長崎出身の元放送局員(本木)が広島、長崎の被爆者の肉声を収集する。そこでひとりの被爆者と運命的な出会いを果たす。証言だけでなく、記憶を伝えるということにおいても迫力ある作品だった。(原案=伊藤明彦『未来からの遺言 - ある被爆者体験の伝記』、企画=松本太一、脚本=池端俊策、演出=柴田岳志、制作統括=加茂義隆、尾崎裕和、熊野律時、プロデュー

サー＝松本太一、森井敦、出演＝本木雅弘、阿部サダヲ、尾野真千子、石橋静河、ギャラクシー賞テレビ部門8月度月間賞)

●『どうせ死ぬなら、パリで死のう。』(NHK、3月16日)

大学の非常勤講師をする人生をこじらせた若き哲学者(岡山)と、彼の甥で人生を諦めた少年(森)のふれあいを描く。人生を悲観しつつも共に過ごすうちにやがて将来へのほのかな希望を見出す。脚本は、世界を代表するペシミスト(悲観主義者)の思想家・シオランをモチーフに書かれたオリジナル脚本。45分と短いけど深い味わいがあった。(作＝伊吹一、演出＝松本仁志、出演＝岡山天音、森優理斗、制作統括＝磯智明、プロデューサー＝葛西勇也)

※原作の作品名はドラマのタイトルと異なる場合のみ表記した。

なかまち・あやこ

日本大学芸術学部教授。これまでに「国際ドラマフェスティバル in TOKYO」東京ドラマアワード審査委員長、文化庁芸術祭執行委員会審査委員など放送関連各賞の審査委員を務める。著書に「ニッポンのテレビドラマ21の名セリフ」(弘文堂)ほか。